

# お昼代約束手ランチエスカ

昼飯用

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

「分かってたんだ。俺達の真実は、明日のお昼代だって」

魂が齎す偽りの恋。肉体が選んだ偽りの愛。歪みが織り成す螺旋の中で、偽物を嘲笑い本物を求める、恨み、辛み、妬みの残滓。

魔術師が恋を知り、魔女が愛を知る時、二人の真実はそこにある。

——さあ、始めよう。自らが世界で一番尊いと感じた恋と愛の、答え合わせを。

『お昼代契約ランチちゃん』の続編です。需要などない。

# 目次

1.	それからの歪み	1
2.	傷疼く学園	9
3.	黒い外套	19
4.	夜が明けて	30
5.	二人の決意	40
6.	伝える事	50
8.	恨みの外套	59
8.	辛みの外套	69

## 1. それからの歪み

——美しい少女だと思った。

姿形が美しいのではない。魂の在り方が美しかった。

美しさを形作る要因が空腹である事は苦笑するしかなかったが、生の輝きを知っている証であった。

自らの魂の醜さを知る身としては、その美しさに惹かれていく事は無理からぬ事。

そして、その美しさに触れる事さえ躊躇ってしまう現実も、また。

故に、君の幸せだけを願った。命が正しく輝く事だけを祈って、日々を過ごした。

終わりは呆気なく訪れる。幕引きは己の手で。数多もの後悔を残して。

散りゆく日々の末。残され、摩耗していく筈の後悔。その中で見た、夢を駆ける君。

「——君が居る場所は、そこではない」

書き変わっていく。始まりから連なる想念も。真に願っていた幸福も。

変わっていくのは、己の弱さ故なのか。

……それとも。始まりから全て醜い偽物で。美しい本物とは掛け離れていたからか。



二月も終わりに近付いた深夜零時、隣を歩くフランチェスカⅡフリジメリカが薄青の髪を揺らして訊いてきた。

「芳乃君、明日のお昼は何がいいですか？」

黒を基調としたゴシック染みた服装から放たれるには、随分と庶民的な問いだった。

外国人であるフランチェスカにはそういった服装がよく似合っている、というのが秋月さんの弁だ。

それにしても、明日の昼食か。まあ、これは考えるまでもない事だ。「鍋だな。寒いし丁度いいだろ」

訊かれたから答えただけなのに、「きつと芳乃君は一年中同じ事を言うんでしょね……」と呆れが返ってくる。

気を休めるようにそんな慣れたやり取りをしながらも、フランチェスカは俺に身を隠すように寄せて、服の袖を掴んでいる。

彼女なりの甘えというわけではない。百四十年も前に受けた心の傷が、彼女に夜間の外出を困難にさせていた。

それは彼女が目覚めた九月の終わりから数ヶ月が経とうとしている今でも同じ事で、こうして俺が傍に居なければ、殆ど日課と化している散歩さえままならない。

周囲を警戒するように見回す仕草は珍しくない。安全だと頭では分かっているけど、何か物音がする度に俺の服の袖を強く握ってくる。

夜に彼女が気を抜ける場所は、俺と共に住んでいる小さなアパートの一室。増やす事を拒まれ、未だに共に使っている一枚の布団。その中で俺の背中に寄り添って眠るまでの僅かな時間が、フランチェスカが安らげる瞬間だった。

「なあ、気が休まらないなら散歩を止めたっていいんだぞ。運動機能はもう問題ないだろ」

先程までの会話の流れを無視してまで、口からそんな言葉が出てしまう。

こうして何かに怯えながら歩き続けるフランチェスカが心配で、問い掛けるのは何回目だろうか。

十月の半ばから、俺は放課後に秋月さんの仕事を手伝うようになった。フランチェスカの身柄を保護する際に出来た借りを返す為で、日中はフランチェスカが手伝っている。

しかしフランチェスカの手伝いの方は返済には含まれないようで、給金を渡されていた。フランチェスカは困惑していたが、俺はそれで構わなかった。彼女にも生きる術が必要だし、自分で金を稼ぐ事が何か彼女を変えるきっかけになるかもしれない。

まあ、今彼女が纏っているゴシックの様に、偶に着せ替え人形に

なって帰ってくるのは困りものだが。『女の子なんだからお洒落させてあげてないと駄目ですよ!』とお叱りの念を脳内に直接送られたりもした。服代は秋月さん持ちらしいし、秋月さんへの借りがどんどん増えていく。

ともかく、秋月さんの仕事の手伝いがある日は、俺の帰りは当然遅くなる。家に帰る頃には補習時間を過ぎていている事もざらだ。帰宅後に食事や入浴をしてそれから散歩をすれば、こんな時間になる事は避けられない。

これまでのリハビリのおかげで、日中活動する分には支障はない。身体的にも精神的にも負担が掛かる夜間の散歩をするメリツトは無いに等しい。

……だが。この問いに彼女が頷いた事は無い。今回も彼女はゆつくりと、縋るように首を横に振る。

「いいんです。これはあたしがしたくてやっている事ですから」  
そう言われる度。俺は口を噤んで彼女の言葉を聞き入れるしかない。

俺はフランチェスカが散歩をしたい理由を問う事が出来なかった。

「芳乃君の迷惑じゃなければ、これからも」

声にする事無く、俺は頷いた。

分かっている。フランチェスカが夜の散歩を止めない理由も、それを俺が問う事が出来ない理由も。

フランチェスカは自らの中にあるあいつを求めている。十月のある日。起こる筈が無い、魂から肉体への記憶の逆流。記録としての情報の置換。

あの瞬間だけ。彼女は紛れも無くあいつだった。

九月の半ばから、約一週間。俺と共に亡者の学園を駆け抜けた、フランチェスカの魂。

もう二度と会う事が無いと分かっている、かけがえのない存在。

あれから、あいつの記憶がフランチェスカに流れ込む事は一度たりともない。

だからこそ、フランチェスカは夜の散歩を止めないのだ。自らの中

にある自分のものではない記録。それに従って行動を模倣する事で、自らの中のあいつを呼び起こそうとしている。

それは正しく擬態や模倣と呼ぶに相応しい。

「あたし、こうしてるのが幸せなんです。大好きな芳乃君と、二人で歩く事が」

それが誰の為であるのか。そんな事、考えるまでも無く察しが付く。

こうしてフランチェスカから好意を伝えられる事は珍しい事じゃない。フランチェスカは俺の事を好いてくれていた。

だからこそ、俺は彼女の擬態に何かを言う事は出来なかった。

ふとした瞬間。たとえば微かに違う俺への呆れ方とか、未知の出来事に対して興奮より怯えが先に来る事とか。

そんな何気ない瞬間に、俺は違和感を覚えて。無意識の内にフランチェスカの中にあいつを探してしまっている。

俺の心は欠けている。胸に空いた穴を埋める何かを探している。

逆もまた同じだった。疑問を俺に訊く時の楽しそうな表情とか、食べ物に関して結構貪欲な所とか。

フランチェスカの根底にあるあいつの面影を見る度に、俺の胸の中のどこかが疼く。

俺とフランチェスカは、こうして歪に生きている。時間が解決する事だ。いつかは慣れる時が来る。そう頭では分かっているけど、それだけじゃどうにも出来ない瞬間がある。

——そんな風に思ってしまったからだろうか。

「……」

適当に歩いていた筈なのに、ここに辿り着いてしまった。

私立穂又学園。俺が二年以上通っている学園で、嘗ては一人の魔術師の手によつて、夜になれば亡者の学園と化していた場所だ。

事件の解決後は魔術師が敷地内に張っていた「結界」も消え去り、残るは魔女の度重なる死が生み出した「反転」の「結界」のみ。その「結界」も魔女であるフランチェスカがこうして現代に生き、死への否定的な概念を捨て去れば、魂の摩耗を待つ事無く消えていく。

深花家に課せられた「結界」の監視も、俺の代で終わることだろう。

全てが終わった事だ。事件の顛末だけは記録に残り、その中にあった人の想いは記憶の中だけに残る。

それでいい。自分にそう言い聞かせ、学園の前を通り過ぎようとするが、それは叶わない。袖を掴まれている方の腕が引つ張られている感覚がして、俺は足を止めた。

「フランチエスカ？」

袖が引かれるという事はフランチエスカが着いてきていない事を意味する。振り返って彼女の様子を確認すると、フランチエスカはぼーっとした様子で校舎を眺めていた。

意識ははつきりしているようだ。俺が名前を呼んだ事をはつきりと認識しながら、未だに校舎へ視線を向けたまま口を開く。

「芳乃君。そろそろ、「反転」の「結界」が作用する時間ですよね」

「……ああ」

自らの中にあるあいつの記憶から穂又学園の「結界」の性質を読み取ったのか、そう確認を取ってくる。

漸く俺の方を見たが、意を決したのかどこか遠慮がちに訊いてきた。

「誰かが呼んでいる気がするんです。確認しに行っちゃ……駄目ですか」

フランチエスカの中には、どんな想いが巡っているのだろう。

自らの死への恐れが張った、対象の性質を「反転」させる「結界」。

一人の男が作り上げた少女の為の学園を根底から覆し、運命を狂わせた呪い。

俺とあいつが駆け抜けた、恋情が詰まった夜の舞台。

「気のせいだ。行っても、何も無い」

それら全ては終わった事だ。さつき自分に言い聞かせた言葉をフランチエスカにも言い聞かせる。

フランチエスカがこうして現代に生きている事で慰霊塔と桜の監



視に終わりを告げられても、変わらず「結界」の監視は続けている。  
「結界」の動きにおかしな様子はない。亡者の学園が作り上げられる前と同じく、静かな夜が過ぎていくだけだ。

夜の散歩でセンチメンタルになっているだけだ。今夜はもう帰って、一緒に眠ろう。

そう伝えてみても、フランチェスカは後ろ髪を引かれるように学園を気にしている。

「……仕方ない。少しだけだぞ」

本人がここまで気にしている事を、他人が否定をする事もない。行って納得するのなら、行かせた方が後腐れもないだろう。

そう自分とフランチェスカを納得させる為の言葉を浮かべ、彼女の方を見る。

フランチェスカは後ろめたそうに微笑んで、「ありがとうごさいます」と礼を言った。

——こんな時、あいつだつたら。そんな言葉が過った瞬間、無理矢理に思考を遮断する。

目の前に居るのはフランチェスカだ。そのつもりで助けたのだから、それだけは間違える事は許されない。

俺は会ってみたかったんだ。あいつが最期に語ってくれた、フランチェスカⅡフリジメリカに。

「芳乃君？」

フランチェスカが心配そうに俺の顔を覗き込んだ。顔には出さなかった筈なのに、やっぱり俺の微かな変化を読み取るのだけは上手いんだな。

……不味い。こんな場所に来たからか、いつもよりずっとこうした思考が強くなる。

早くフランチェスカの望みを叶えて、次の朝を迎えた方がいいだろう。

それは逃避と変わらないのだろうか。今の俺には分からない。

フランチェスカがあいつを見せたあの瞬間がなければ、こんな気持ちになる事もなかったのかもしれない。

フランチェスカはフランチェスカ。俺は彼女を一人の人間として見れて、それから新しい関係が続いていった筈なのに。



あたしが現代に目覚めてから、数ヶ月の月日が過ぎた。

九月の終わりから年を跨いで二月の終わりになるまで生きてきたけれど、世の中はあたしの記憶とはまるで違って、文字通りタイムスリップをした気分。

それでも置いていかれる事無く早く馴染めたのは、あたしのものではない現代の記憶があったから。

ランチちゃん。あたしの魂が、芳乃君と契約をした存在。

元になったあたしの魂は今ほきちんとあたしの肉体の中にあつて、フランチェスカという人間を為しているけれど。魂だけが別の存在として生きている時期が確かにあった。

あたしの記憶ではない、ランチちゃんが生きた証。あの夜。少しだけ魂から肉体へ流れ込んだ出来事と感情は、あたしの芳乃君に対する気持ちの礎になった。

亡者の学園の最後の夜。芳乃君に殺される事を望んだランチちゃん。自らの恋心を告げて、お昼代の契約と共にその役目を終えた。

熱烈な恋情だった。死への恐怖を積み重ねて「結界」を張った過去を持ちながら、芳乃君になら殺されてもいいとさえ思っていた。

それはきつと、芳乃君が誰かの死を背負って生きていると知っていたから。残念ながらあたしにはそれが誰の死であるかの記憶は読めなかった。だけど、ランチちゃんは亡者の学園を駆けた一週間の間に、芳乃君がどれだけその人を想っていたかを知っていた。

——そしてそれは、ランチちゃんに対しても同じ事。

彼女はもうあたしの魂に戻ってしまったていて、ランチちゃんという一つの存在に戻る事はきつともうない。

芳乃君はランチちゃんの死を背負って生きている。死を背負って生きながら、あたしの中にランチちゃんを探している。

あたしを見ながらあたしではない誰かを探している。その事實はあたしの胸を締め付けるけれど、それは芳乃君も同じ事。

ランチちゃんを探す寂しそうな目は、目覚めたあたしを見つめていた切なさと同じだった。

せめてあたしがランチちゃんの記憶を全て引き継げたら。ランになれたら、その寂しさを埋める事が出来ますか？

一縷の望みを掛けて、あたしはランチちゃんの真似を続ける。それが芳乃君を傷付けていると知りながら。

寂しさを埋めたい理由は、あたしが芳乃君に抱いている恋心。こうして夜の散歩に付き合ってくれる事とか、あたしの身を案じてくれる事とか、口下手ながらも伝わってくる優しさに触れる度に増していくこの想い。

でも、時々不安になる事がある。あたしは本当に芳乃君の事を好きなのか。ランチちゃんの気持ちに引っ張られただけで、同じ人を惹かれているんじゃないか。『好き』だと告げるあたしの言葉は、本当にあたしの言葉でもあるのだろうか。

あたしの中のランチちゃんが目覚めなければ、こんな気持ちになる事もなかったのかもしれない。

ランチちゃんはランチちゃん。あたしはランではなくフランチェスカとして、芳乃君を好きになれた筈なのに。

## 2. 傷疼く学園

「そういうえば、どうやって校舎に入りましょう」

フランチェスカの要望通り、“反転”の“結界”の様子を確認しに行く事にした。

今俺達が居るのは穂又学園ほぎの敷地の外。つまりは敷地内に入らなければならぬのだが、門から堂々と入るのは流石に無理だ。セキュリティが作動して、警備会社との鬼ごっこの幕開けになってしまう。敷地内に入るには敷地全体を囲う塀を乗り越えなければならない。

だが、敷地を囲う塀は高い。二メートル以上ある壁は、普通の人間であればよじ登るのも一苦労だ。フランチェスカの様な少女には超える事は難しいだろう。

あくまで一般人であれば、だが。生憎と俺は魔術師なので、この程度の高さの壁なんともない。

一度眼鏡を掛けて、直ぐに外す。俺の精神を強制的に高揚させるスイツチだ。高揚と共に魔力が通る回路が開いていくのを確認して、“身体能力強化”を発動する。

「フランチェスカ」

「はい……きやつー」

一応名前を呼んでからフランチェスカを抱きかかえ、彼女を地面から遠ざけた。

事態が分からずに顔を赤くしたまま混乱しているフランチェスカに「舌を噛むなよ」と忠告した。

その言葉は通じたのか、はっと口元を手で押さえて何度か頷いて答えてくれる。その様子がどこかおかしくて笑いそうになったのは黙っておくべきだろうか。

ここからならグラウンドの方に侵入出来る。足に力を籠めて跳躍し、二メートル以上の壁を軽々と飛び越える。地面に着地した後、自らの意志ではない急な浮遊感、そして墜落感に襲われたフランチェスカは小さく呻いていた。

「大丈夫か？」

「は、はい……」

ほんの一瞬の出来事による負担は、それこそ一瞬だったようだ。応答にも問題はないし、活動に支障は残らないだろう。

フランチエスカを降ろす為に腰を落とそうとするが、それを阻止するかの様に服を握られる。どうしたのかと彼女の顔を見てみれば、さつきから赤い顔を更に紅潮させている。

何かを言いたそうにして、後一步踏み出せないでいる。そんな様子だった。

少し待ってみれば、やがて意を決したらしい。服を握る力を強くして、口を開く。

「あ、あの……あたし、重かったですか？」

「重い？ 体重の事か？」

訊かれた意味が分からなかったので訊き返すと、恥ずかしそうに頷かれた。

三メートル程の跳躍が出来る今の俺に対して、フランチエスカの体重は何の障害にもならない。

俺が質問の意図を掴みかねているのを察したフランチエスカが、気恥ずかしそうに顔を伏せてぼそぼそと呟いた。

「え、えと……あたし、きつと芳乃君があたしを目覚めさせた時より、体重が……」

「ああ……成程な」

要するに自分が太ったのを気にしているらしい。

そんな事を気にする必要はないだろうに。フランチエスカはまだまだ痩せている方だし、どれだけ悪く見積もっても標準体型だ。

「元々が軽過ぎたんだよ、お前。背負って帰ってる時、本当に人間を負ぶってるのか心配になったぐらいだ」

同じ布団で眠る時だって、寝ぼけた表紙に手折れてしまわないか不安にもなった。

それぐらいフランチエスカという少女は儂くて、あいつが明日のお昼代を契約の代価に選んだ理由にも納得がいった。

今の食べ物フランチエスカが生きていた時代よりずっと栄養価

も高い。栄養失調染みた身体に肉がついてきてくれたのは、寧ろいい傾向だろう。

「俺が言うのもどうかと思うけど、まだまだ成長途中なんだからちゃんと食えよ」

「それなら、いいですけど……。で、でも、太ってきたって思ったら言ってくさいね?」

そう言われると、どうにもフランチエスカという少女を意識させられる。

こうして触れ合っている場所から伝わる高めの体温。身体の柔らかさ。指と指の間を流れる、薄青の絹糸。

それ等をこれ以上感じているのは不味い気がして、フランチエスカの許可も取らずに彼女を降ろした。

意外とすんなり体勢を整えてくれたフランチエスカは、俺の動揺に気付いたのか心配そうにこちらを覗き込んだ。

「何でもない」と短く答えて、俺は校舎の方へ歩き出した。フランチエスカも慌てて俺の後ろを着いてきて、服の袖を掴んでくる。

昇降口まで辿り着いた俺達は一旦そこで待機をする。『反転』の『結界』は既に作動していたが、いきなり入るのも憚られる。

一人で行くのならば、きつと躊躇う事無く踏み込んだだろう。だが、フランチエスカと行くのは……心の準備が、必要だった。

そんな俺の様子に気付いたのか気付いていないのか、フランチエスカは不思議そうに訊いてきた。

「『結界』が動き出した後って、あたし達は中に入れるんでしょうか?」  
その質問に、どうやら悟られてはいないようだと内心安堵する。

「何を今更。入れるに決まってるだろ」  
「そうなんですか?」

「お前の『結界』は『結界』としては作用してないよ。元々の性質が内部に入れない性質か外部に出さない性質かは知らないが、『反転』の性質はそれすら『反転』させてる。つまり誰でも出入りは自由だ」  
「へえ……『結界』って、そんな性質があったんですね」

フランチエスカが楽し気に頷いて、ショーウィンドウの様にぼーっ

と昇降口の奥を覗き込んだ。

そんなフランチエス力を横目に、俺は記憶の淵からあいつの事を思い出す。

「結界」の性質についてはあいつに教えてやった事だ。その性質を利用して、あいつは「結界」に捉えられた俺を助けてくれたりもした。

そつと目を閉じて、あいつとの思い出を打ち切った。目の前に居るのはフランチエスカだ。あいつじゃない。

だが、疑問を訊く時の期待した様子は確かにあいつと同じものだった。その陽炎の様な既視感を堪えて、どうにか会話を続けた。

「ま、つまりは真正銘の異界だな。性質を「反転」させる異界なんて、世の魔術師が知れば垂涎ものだけ」

「そうなんですか……？　と言うよりは、知られてなかったんですね。そっちの方が驚きです」

「百四十年前の粛清自体が協会の黒い部分だし、大昔の出来事だからな。「制隠協会」の中でも知ってる人間は多くないし、協会に所属していない魔術師なんて知る由もない」

「あたしは魔術に全然詳しくないですけど、そういうのって分からないんですか？」

質問をされて、それに答える。この感覚は久しぶりだ。

胸の穴が疼く感覚を？み込んで、フランチエスカの問いに答える。「お前が張った「結界」は「結界」としては作用してないのは言ったよな。出るのも入るのも自由だし、尚且つお前の想念が生んだものだから人為的なものじゃない。態々そこを調べない限り、魔術師じゃ見つけられないだろうな」

実際、上桐は自らが張った「結界」の中にもう一つの「結界」がある事に気付けなかった。

上桐は「反転」の「結界」を求めたわけではなく、学園そのものとして行われる生徒達の学校生活を欲していたのだから当然の事ではあるが。

とにかく、「結界」の特性はともかくとして、外界との差異を出さ

ずには上手く世界に馴染んでいる。その隠匿性と併せて監視を続けていけば、悪用をしようとする魔術師の存在には直ぐに気付けるだろう。

「そうなんですか……でも、分かる人もいるんです?」

「それは『結界』を張った張本人だ。後は……まあ、特別勘がいい人間とか」

「第六感……ですか」

フランチェスカの答えに頷く。ああいう手合いは一番理不尽だ。

経験からでもなく、理論からでもなく、唯何となく気になった。そんな理由でこちらの手を暴かれるのは堪ったものではないだろう。

まあ、俺にそんな知り合いは居ない。これからも知り合わない事を祈っている。

そんな事を思っていれば、どうにか俺の中での踏ん切りもついた。

「行くか」

「は、はい」

多少の緊張を抱えたままフランチェスカに手を差し出すと、自然な手付きで服の袖を握られた。

夜の散歩に行く前に必ずやっている事だ。そうしなければ、フランチェスカは夜道を歩く事もままならない。

フランチェスカは昇降口の扉に手を掛け、鍵穴を見つめ強く念じる。かちり、と鍵穴から小さな音がした。掛けられていた錠の状態が

『反転』して解かれた証だ。

自らの生と死を『反転』させられる程の魔女であるフランチェスカにとっては造作もない事だ。尤も、フランチェスカは自らの身の自由と引き換えに、自然の摂理を覆す程の『反転』を使えば、俺の命を代償に彼女の心臓が止まる術式を俺と結んでいる。

今のフランチェスカには『魔女』と呼ばれる程の力はない。直接的な攻撃手段を持たない魔術師相手には反則染みた効果を発揮するが、それ以外の生活では今みたいに鍵を開けたりする程度の、ほんの少しのずるぐらいにしか使い道のない魔法だ。

それでいいのだ。フランチェスカがこれから生きる人生には、自然



の摂理を覆す必要などない。

「……行き、ます」

静かに宣言して、フランチェスカは昇降口の扉を開けた。

少し重い扉が横にスライドし、校舎への入口が出来上がる。

だが、フランチェスカの足がその先に向かおうと動き出す事はなかった。

一体どうしたというのだろう。そう思い彼女の顔を覗き込めば、自らの愚かさを呪った。

「っ——は、っ……は……」

フランチェスカは浅い息を繰り返しながら瞳孔を開いている。明らかに過度なストレスに襲われていた。

それは当然の事だ。ここはフランチェスカ自身が何度も死を迎えた場所なのだ。

一方的に命を奪われ、幾度とない痛みと他者の犠牲を感じながら必死に逃げ回り続けた地獄。

そんな場所に戻ってくる事が、フランチェスカにとってどれだけの負担になるかは想像すら出来ない。

少し考えれば分かる筈の事だったのに、どうして連れてきてしまったのか。

——それとも俺は、自分の中の何かに引っ張られ、考えないようにならしていたのか。

「……帰ろう、フランチェスカ」

『ここはお前が居ていい場所じゃない』と言わんばかりに腕を引いても、フランチェスカは頷いてはくれなかった。

唇を青くして、病的なまでに血色が悪くなり始めても、昇降口から目を逸らしはしなかった。

そうまでして意固地になる理由。それは——。

「呼んでる人が、居ます」

ここに来たいと言い出した時と同じ理由だが、確信に近い物言いになっっていた。

小さな身体が震える程に怖い癖に、誰かも分からない人間が呼んで

いるから、お前は行くのか。

「確かにあたし、怖いです。でも、この人を放っておいたら、きつと後悔します」

……そういう所、変わらないな。

ああ、そうだ。俺にも経験がある。『月に咲く死垂桜<sup>しだれざくら</sup>』。俺の友人である染衣桜<sup>そめいざくら</sup>の死後の魂が、魔術師によってこの校舎に誘われた。

忘れなければいい筈だった。思い出さなくてもいい事だった。既に死んでいる人間なのだから、亡者の学園からの解放による影響を考慮する必要もない存在だった。

だけど俺は、彼女を一足先に亡者の学園から解放する為に、あいつと対峙した。

精神はずたずただった。身体に異常が無いのをいい事に、無理矢理に階段を上がっていった。

そうまでしてあいつを助けたかった理由は、心がそう望んだからだ。

理屈じゃない。完全な説明なんて出来ない。魔術師が聞いて呆れるが、それが全てだった。

きつと、今のフランチェスカもそうなのだ。だったら俺も付き合うしかないだろう。一瞬でも共感してしまった俺の負けだ。

どの道、俺が居なければフランチェスカはここを動く事さえままならない。置いて帰る気などないのだから、好きにさせてやろう。

まずは緊張を解いて安心させるのが先決だろう。足が竦んでいるのでは移動もままならない。

「大丈夫だ。百四十年も経ってるんだぞ？ お前を襲った連中はとつくに全員死んでるよ」

言っただけから、自分の口下手ぶりに流石に呆れた。

これは慰めではなく情報だ。普段自分がこういった事に慣れていないのが仇となった。

フランチェスカもそれを理解しているのか、漸くこちらを見て、少し呆れたようににはにかんでくれた。

「……芳乃君、本当に慰め方が下手なんです」

「だな。自分でも少しどうかと思ってる」

「大丈夫ですよ。……あたし、芳乃君がちゃんと言葉にしてくれる所、好きですから」

こんな俺を好いてくれるお前にどう答えてやったらいいのか、それはまだ言葉にはならない。

「お前が慰めてどうするんだ、立場が逆だろ」

「ふふ、そうですね」

それでもお前がそうやって笑ってくれたのなら、下手なりに何かを伝えた甲斐もあったのだろう。

多少は緊張も解けたのか、フランチエスカの足が動き出す。俺達は校舎の中へ足を踏み入れた。

「電気、点いてないんですね」

周りをきよろきよろと見回しながら、フランチエスカはそう呟いた。

俺もちらりと周りを見て、状況を確認する。俺を閉じ込めた忌々しい姿見も変わらずそこにあった。

嘗て、ここが亡者の学園だった頃は電気が点いていた。校舎の「結界」とは別に学園の敷地に沿って張られた「結界」が作用していたからだ。それが無くなった今、校舎を照らすのは窓から入る月明かりぐらいのものだ。

夜と呼ぶに相応しい、数メートル先も覚束ない闇。そんな場所に呼んでいる人間が居るとしたら、どうせそいつは碌な奴じゃないだろう。

俺には居るかどうかも分からないそいつを探さなければいけないのは気は乗らないが、そんな碌でもない奴とフランチエスカを一人で会わせるわけにはいかない。

「どこに行く？ お前を呼んでいる奴を探さなきゃいけないだろう」  
「……多分、こっちです」

自分を通っていた頃とは造りも違うだろうに、フランチエスカは迷う事無く歩き出した。

廊下を進んだ所で、丁度二階の渡り廊下の下に位置する場所に出

る。校舎の外ではあるが舗装されている、体育館に続く道だ。

俺も異界と化した状態では来た事が無かった。七不思議達の内、元々の調査対象だった『林檎を剥くジャックナイフ』、『童話に還るアリス』、『走り続けるスプリンター』が立ち寄りなかつたからだ。

俺があいつと行った場所は、家庭科室、図書室、グラウンド……そして、屋上。

「芳乃君？」

知らずに屋上の方を見てしまった俺を不思議に思ったのか、フランチエスカが俺の名を呼ぶ。

直ぐに視線を戻して、「何でもない」と答える。

あいつも眠りに就けているのだろう。願わくばその眠りが覚めなのまま、世界に溶けていければいい。

「静かな夜だっと思ってただけだ」

「前はもつと騒がしかったんでしouxか？」

「……ああ」

それ以上その問いに答える事無く、俺は体育館の方へ意識を向ける。

「お前の目的地は体育館でいいのか」

「確証はありませんけれど……。でも、呼んできるとしたら……。……ここで」

「そりやまた、確証はないのに確信的な言い方だな」

俺の言葉に、フランチエスカは静かに頷く。

その横顔から恐怖心を抑えている事は明白で、俺の服の袖を掴む力がその度合いを教えてくれる。

「あたし……。最後にここで封印されたんです」

階段の先にある体育館の扉を見つめて、魔女はそう呟いた。

当然、この体育館も建て直されている。彼女が死んだ現場としては、厳密に言えば別物だ。

「あたし、殺された時の記憶は正直ぐしゃぐしゃで。相手の顔も憶えてないですし、殺された場所の順番だって定かじやないんですけれど。最初に殺された場所がああ空き教室で、最後に封印された場所が

この体育館。それだけは……間違いありません」  
フランチエスカの言う通りだった。協会の記録にもそう残されている。

自らの恐怖と戦いながら何とか進もうとするフランチエスカの背中を押せるかどうかは分からない。唯、その勇気を大事にしてやりたかった。

「じゃあ、行こうぜ。こんな悪趣味な場所にお前を呼ぶような奴には、何かしら言っただけでやりたい気分になってきた」

「……過保護ですよ、もう」

やっぱり呆れたようににはかむフランチエスカ。その足が動き出すのと同時に、俺も体育館へ歩を進めた。

### 3. 黒い外套

体育館に掛かっていた鍵を「反転」させ、静かに扉を開けようとするフランチェスカ。

しかし開けようとはしていても、開けはしなかった。震えながら扉に手を掛けるだけで、時間だけが過ぎていく。

やはり、自らにとって嫌な思い出がある場所には、近付く事さえ勇気が要るのだろう。俺にとって屋上がそうであつたように、フランチェスカにとっては体育館は死の記憶が染みついた場所なのだ。

しかも俺とは違い、フランチェスカの死の記憶は自らのものだ。厳密には体育館で行われたのは殺害ではなく封印だが、それでも自らの心を抉るには十分過ぎる。

魔法が使えるだけで、感性は普通の少女なのだ。平然と足を踏み入れられる方がどうかしている。

……と思っていたのだが、現実とは違うみたいだった。

「ぐ、ぬぬ……」

確かに、手が震えてはいた。力を籠めて、それでも扉が動かずにぶるぶると震えていた。

力み過ぎてフランチェスカの顔が赤くなっていく。……そういえば体育館の扉は鉄製なので、特別重かったな。レールが錆びかけているので滑りも悪い。女子が片手で開けるのは苦勞するだろう。

「代われ。開けてやるから」

「す、すみません……」

勝手に何か重い事を考えていた自分が阿保に思えてきて、溜息と共に俺はフランチェスカと扉を開ける役割を交代した。

力を籠めてみても中々に扉は重い。やっぱりフランチェスカには無理だったな。

それでも腕の力だけではなく体重移動も使ってみれば開かない筈はなかった。擦れる音を響かせて扉は開く。

「凄……芳乃君、力持ちですね」

「一応男だからな。流石にお前よりずっと力はある」

「男の子なのは知ってますよ。……いつも一緒に眠る時、あたしとは身体つきが違うなあって思ってますもん」

「……あつそ」

仄かに照れながらそう言われても、それはお互い様である。

眠る時、背中に伝わる熱のある柔らかな感触。それでいて、霊体だったあいつとも違い、確かな質量を持っている。あいつと同じように眠っていた時には意識していなかった、自分とは違う匂いも感じた。

フランチェスカという少女がそういう存在なのだ と理解をするまでは、不思議と目が冴えてしまったものだ。

「……体育館に行くのは平気なのか？」

「……どういう意味ですか？」

「怖いだろ。それぐらいは分かるよ」

「ばれちゃってましたか……」

ばつが悪そうに笑うフランチェスカに、俺は唯頷いて返す。

『行かなくていい』とはもう言わない。この「反転」の「結界」に踏み込む際に、フランチェスカは自らの恐怖と戦いながらも後悔しない事を選んだのだから。

俺はその選択を邪魔する事だけはしない。俺に出来る事は、フランチェスカⅡフリジメリカの傍に居る事。

それはフランチェスカにも伝わってくれているのだろう。俺達は——俺は、今も変わらず夜には隣に居るのだから。

「でも、平気です。……いいえ、平気じゃなくても頑張れます。芳乃君が居ますから」

ばつの悪さは拭えてはいなくとも、その笑みは少しだけ気が緩んでいるように見える。

それが確認出来れば十分だった。フランチェスカは自らの言葉に嘘を吐かないよう足を進め体育館内へ入っていき、俺も後を追った。

体育館も校舎と似たようなものだった。月明かりを頼りに照らされる内部は、窓の大きさから若干校舎より明るいくらいのもので、闇と呼んでも差し支えない。

体育館の中央まで歩いて、周囲を確認する。

内装がおかしくなっている、なんて事もなかった。包丁が全てジャックナイフになっている家庭科室。本棚の中身が童話だらけの図書室。種目に使う道具が一切ないグラウンド。それらを見てきた俺にとっては、拍子抜けに思えてしまう程何の変哲もない。

俺の記憶通りの体育館。そして、フランチエスカの記憶にはない体育館。

フランチエスカが通っていた当時の体育館から何度か建て替えられているのだ。フランチエスカの記憶以外に、最早彼女との縁なんてありはしない。

「……待っていた」

——そんな場所に、そいつは居た。

壇上の下で、そいつは一人待っていた。暗闇のせいで姿ははっきりとは分からない。まるで闇から染み出たような、ぼんやりとした輪郭が確認出来るだけだ。

その様子が嘗て亡者の学園に誘われていた薄緑の輪郭達と被って見えたのは気のせいだろう。

影が一步踏み出す。歩いて、近付いてくる度に輪郭が肉付いていった。

膝まで届く、長く黒い外套を纏った人型だった。ポンチョのような形状をしているそれは、そいつをすっぽりと包み込んでいた。背丈は俺より少し低く、外套のせいで詳しくは分からないが、身体付きも貧弱そうに見える。

首から上は外套のフードを深く被っている事で完全に隠されていた。辛うじて口元が見えるが、それもこの薄暗さでは当てにはならない。

外見からでは男か女かも、年代さえも読み取る事が出来ない。そんな不気味な存在が自らを待っていた。それはフランチエスカにとつては恐怖だろう。

だが、それ以上に俺を襲っていたのは、微かな既視感だった。

どこかで見た事がある。……どこでだ？　こんな怪しい恰好をし



た奴なんてそうそう忘れる筈がないのに、それが思い出せない。

「あなたが……あたしを、呼んでいたんですか？」

「待っていたよ、フランチエスカ」

二度目の外套の声から、漸くこいつが男だと察した。

男の言葉の意味を理解すると同時、既視感を無視してフランチエスカを庇うように前が出る。

この男はフランチエスカの名前を知っている。たったそれだけの事で、警戒に至らせるには十分だった。

フランチエスカⅡフリジメリカという少女の戸籍がこの時代に来たのは、ほんの数ヶ月前からだ。

今のフランチエスカは百四十年前の魔女とは別の人間になっている。協会の極一部しか知らない魔女の存在を、並大抵の人間が知っている筈もない。

世間では普通の少女で通っているフランチエスカに興味を抱く理由もない。……だとしたら、こいつは。

前に出た俺の方へ、男の首が微かに動く。

「そして……深花芳乃しんかよし」

その布の奥に隠された瞳から視線が浴びせられる。

——敵意。それも亡者の学園で浴びせられた経験の無い、殺意が籠められた敵意。

フランチエスカに言葉を向けていた時には無かった明らかな敵対のサインが、俺には容赦なく向けられていた。

ポケットの中にあるカッターナイフの存在を強く意識する。

「……君が契約を結ばなければ、彼女は幸せに眠っていられたのに」その言葉に、俺はこいつの危険性を確信した。

フランチエスカの名前を知っているだけでなく、俺の名前まで知っている。

そして何より、フランチエスカという人間の素性まで。

口振りからして俺がフランチエスカの魂と契約し、あいつと亡者の学園を駆けた事も当然知っているのだろう。

フランチエスカⅡフリジメリカが“反転する魔女”である事を知

りながら、彼女の事を待っていた。

「お前、何者だ」

知らず呟いた短い問いに、頭巾の奥から言葉が返される。

「何者でもない。私は存在しない者だ。唯一つ、本物だけを求め続ける、名前さえない探究者」

要領を得ないこの男の言葉に、どうしてもだが俺は納得し掛かけてしまっていた。

納得を通り過ぎた後に身体の奥から溢れ出る嫌悪感を吐き出すように、俺は言葉を投げ掛ける。

「名前はなくても理由ぐらいはあるだろう。どうしてフランチェスカを待っていた」

「無論、彼女が本当に居るべき場所へ連れていく為。誰に脅かされる事もない、安らかに眠り続けていられる場所へ」

それがどこであるかなんて、訊くまでもなかった。

こいつは連れ戻しに来たのだ。フランチェスカが眠り続けていた慰霊塔の下に、目覚めたフランチェスカを再び眠らせようとしている。

フランチェスカが俺の袖を握る力が強くなるのを感じた。怯えているのは明白だ。

「は、誘拐かよ。本物とか本当とか、尤もらしい言葉を並べておきながら、やる事は結局犯罪者と違わない。探究者が聞いて呆れる」

敵意と侮蔑を込めて返した言葉に、外套の男の大した動揺はなかった。

唯、顔も見えないのに。暗闇から放たれる視線だけが俺を射貫き続ける。

「それでも、本物だ。あるべき姿だ。壊されるべきではなかった。続いていくべきだった」

まるで謔言の様だ。俺達に向けて言っているかどうかとも怪しい。「あたしは……」

「もう、傷付かなくていいように……君の未来を閉ざそう」

恐怖を堪えて何かを言おうとしたフランチェスカの声を遮って、外

套の男は告げる。

その声音が優しくかった。そして、苦し気で、切なげで。罪悪感から自らの心臓を握り潰してしまいたいそうだと思えてしまう程、選択の余地が無い言葉だった。

「だけど、そんな事俺にはどうでもよかった。」

怯えている。フランチェスカが、お前に。怯えさせたんだ。お前が、フランチェスカを。

——理由は、それで十分だ。

「フランチェスカ、少し離れてろ」

名前を呼んで、彼女の手を振り払って数歩前に出る。

微かに漏らした声が不安を教えてくれたのに、俺はそれに振り返る事は出来なかつた。

“身体能力強化”を発動し、外套の男の懐に踏み込む算段を立てる。

「続いていくべき幸福を壊した君を、私は許さない」

外套の男は、俺の雰囲気が変わった事を察した。

しかし身構える事はない。余程防御に自信があるのだろうか、俺の“無干渉”にはそういった特性は効き難い。

お前が魔術師か魔法使いかは知らないが、異能に頼った防御は俺には通じない。カッターナイフの一閃は確実にあいつに通る。

こちらが足に力を籠め、跳躍をしようとした瞬間。

「悪いが、荒事には耐えられない。無作法で悪いが、出来る対処を取らせてもらおう」

外套の男はゆっくりと右手を前に伸ばし、何もない虚空を掴む。

パントマイムのような所作が手繰り寄せる結果は、俺の予想だにしていなかった。

「眠れ」

「なっ、に——!?!」

俺の意志とは無関係に身体が揺れた。

痛みはないが後頭部を思い切り殴りつけられたように、頭がぐらつく。平衡感覚さえ奪われた気がして、踏鞴を踏む事さえ叶わない。

身体に力が入らない。虚脱感に抗う術を持たない俺の身体は、情けなく体育館の床に倒れ込んだ。

受け身も取れずに全体重の衝撃を身体全体で受け止めた痛みが、今の俺に唯一ある刺激だった。

「芳乃君！」

「くる、な……。逃げろ……！」

視界の外から掛けられたフランチエスカの声に、何とか声を絞り出しながら彼女を制する。

こんな状況ではフランチエスカを守りきる事は到底無理だ。せめて彼女だけは逃がさないと、この男の思い通りになる。

幸い頭は働いている。俺の身に何が起きたのかを見極める必要がある。

この男が行った事は容易に想像出来る。精神干渉の類の魔術だろう。暗示や催眠といったものでも、行き過ぎれば相手の身体の自由を奪うぐらいは訳がない。

問題はそこじゃない。それが俺に対して通用してしまった事が問題だ。

「無干渉」の「属性」を持つ俺に対して精神干渉や呪いの類は効果は薄い。今まで俺に対して干渉系の異能を通したのは、俺自身の魔力で発動させてしまった術式だけだ。

この耐性をこうも容易く貫通するなんて、こいつは一体――。

「君の心には穴がある」

「な、に……？」

その言葉が、俺の琴線に触れた。

「フランチエスカと行う、嘗て契約した精霊との逢瀬の真似事は楽しかったか」

外套の男の見透かしたような言葉に、身体の奥が熱くなった。

力が入らない身体が本能のままに動こうと微かに痙攣する。こんなにも直情的に怒りが湧いてくるなんて、今までない事だった。

「開いた穴を埋めようとする代償行為。その偽物の慰めがどれだけ彼女を傷付けるかも知らず、何と愚かしい事か」

それだけ、触れられたくない所だったんだ。

お前なんか触れていい部分じゃない。その言葉を口にしていいのは、フランチェスカだけだ。

そう声を荒げてやりたいが、それも叶わない。俺を無力化した事を確認した外套の男が、ゆつくりとこちらに近付いてくる。

俺に向けているのは殺意だ。静かな言葉の中にある確かな殺害衝動が、このままでは俺に襲い掛かってくる。

そんなのはお断りだ。俺はこんな所で死ぬわけにはいかない。自分の終わりは自分で決める。それが俺らしいのだと、あいつは言ったのだから。

だが、どれだけ力を籠めようとしても身体は痙攣するばかりで状況は好転しない。

諦めはしないが終わりは着実にやってくる。そんな時――。

「……そこを退いてくれないか、フランチェスカ」

俺の視界に、闇に溶けるような黒いゴシックが揺れた。

揺れが治まったゴシックはまるで俺と外套の男を遮るカーテンの様に立ち塞がる。

同時に外套の男の足音が止まる。フランチェスカ「フリジメリカが、外套の男と対峙していた。

「ば、かが……にげ、ろ」

「嫌です」

「そこに居ると、君まで傷付いてしまう」

「それでも、嫌です」

声は震えていた。恐怖を乗り越えたわけじゃない。

そうだ。何度も怖い想いをしてきた筈だ。今だって逃げ出してしまいたいに違いない。

それでもこうして立ち塞がり、外套の男へ言葉を返す理由。

「大好きな芳乃君が死んでしまうくらいなら、あたしも一緒に死にます」

……ああ。知っている。

「芳乃君と一緒になら、怖いけれど耐えられます」

死の理由になる程の好意。命を燃やし尽くす程の恋。

あいつが夜に散った。あいつが夜に戻っていった。

止めたかった筈なのに。俺がそれを止めなかったのは、どうしてだろう。

「芳乃君だけを殺しても無駄ですよ。あたしは芳乃君の死を『反転』させます。生き返った芳乃君の心臓が、あたしの心臓を止めます。そういう風になっているんです。あなたは芳乃君だけを殺す手段を持ってません」

動かない身体が恨めしい。

その震える手に、いつもみたいに服の袖を差し出してやりたかった。

「……、」

外套の男の息を呑む音が響いた。それきり、音はない。

ランチエスカの言葉の意味を咀嚼して、自分の中に取り込むような静寂の後。

「君のその好意は……偽物に過ぎない」

言っってはならない事を、こいつは言った。

「どういう、意味ですか」

「君が深花芳乃しんかよしを好ましく思う気持ちは、ランチという精霊に引つけられただけだ」

「そんな事……ありません」

フランチェスカの声が揺らぐ。揺らぎの性質は恐怖ではなく不安に変わっていた。

身体が熱い。本当に熱い。眼鏡を掛けて外す手順を踏まなくても、『魔力回路』が開いていくのが分かる。

さつき俺が偽物だと言われた時とは比べ物にならない程、精神を昂っていく。この感情に怒りという名前がある事に、俺は漸く気付いた。

身体に力を籠める。当然動かない。それがどうした。動かそうとしていないだけだろう。

「そんな気持ちの為に、君がこれ以上傷付く必要は——」

「……お前、少し黙れ」

変わらず、声を絞り出さなければ言葉を発する事さえままならない。

身体が震える。動かない身体を、力以外の何かで動かす。まるで壊れたブリキの様にぎこちなく、手の平で床を捉える。

「芳乃君！」

「許せない……お前の気持ちちが偽物だなんて、俺は絶対に認めない」

虚脱感に抗う事がどれだけ負担になるのかは考えない。そんな事は後でいい。そんな風に考えてしまおう自分を嘲笑うのもまた後だ。

腕で上体を持ち上げて、開いた隙間に片膝を立てる。そのまま膝を支点にして上体を起こして、腰を持ち上げて立ち上がれ。

ほら、簡単だろう。多少ふらつくがやってやれない事はない。

「大丈夫ですか……？」

「は、あ……今は、な……」

フランチエスカに肩を貸されながら、外套の男を睨みつける。

肩で息をする俺の弱弱しさでは威嚇にもならないが、この男の殺意だけには負けたくなかった。

「まだ意識があるのも驚きだが。それよりも、何故立てる？ 力などとうに入らない筈……ぐつ、う——」

外套の男が急に頭を抑え、大きく揺れた。

身体の中で何かが暴れるように身体全体も振り始めた。立ったままのたうち回ると表現する方が正しいだろうか。

「そう、か……私は……！」

「芳乃君、これは一体……」

「さあ、な……」

暴れ続ける外套の男が微かに光り始めた。

光は急速に輝きを増していき、光の粒子へと変わって外套の男を包んでいく。

「フランチエスカ……君の、幸せが……」

そして、風船が膨張に耐えきれず破裂するように。

外套の男の身体が光に包まれたまま大きく三つに弾けて、そこには

誰も居なくなつた。

残されたのは俺とフランチェスカの二人だけ。危機は去つた。そう見ているのだろうか。

「今のは……」

フランチェスカの言葉に、何かを返す事は叶わなかつた。

視界がぶれる。敵が眼前から居なくなつた事で、無理矢理身体を動かしていた何か切れてしまったらしい。

「芳乃君!？」

五感で得た情報を頭で処理する余裕すらない。

目の前が真っ暗になつたのかも分からない程、鋏で断ち切られるように、意識がぶつんと切れた。



## 4. 夜が明けて

ふと、目が覚めた。

朝に眠りから覚めるような緩やかな覚醒ではなくて、スイッチを押して無理矢理切り替えるような、急かされるような目覚めだった。

開けた視界を処理するより先に上体を起こす。目が覚めた直後の景色より身体を起こした景色の方が状況を把握し易かったのは、幸か不幸か。

視界内にある設備と備品には見覚えがあった。穂又学園ほまたがくえんの保健室。そのベッドの上に俺は寝かされていた。一応五体は満足らしい。足の先から指の先まで、ちゃんと感覚が通っている。

四肢の中で唯一満足に動かないのは左腕だが、不自由の理由は外傷に因るものではない。

縫るように左腕の袖を掴まれていた。袖を掴んでいる相手——フランチェスカは臆気な瞳をこちらに向けていたが、状況を理解したのかはつとした様子でこちらに距離を詰めてくる。

「芳乃君！ 大丈夫なんですか!？」

「……ああ、何とかな」

精神干渉系の魔術に抗うという無茶のおかげでまだ少し頭が重い。が、身体と精神には問題はない。

唯、抱き着かんばかりにこちらに密着してくるのは勘弁してほしかった。背中に寄り添われるのは慣れているが、正面から来られるのは些か刺激が強い。

フランチェスカを受け止めながら、その刺激から目を逸らそうと状況を確認する。

「あの外套の男は？」

「え、と……あれから、現れる事はありませんでした」

あの状況の俺達を放っておく理由が、外套の男にはない。恐らくは外套の男が消えたのは奴にも予期していないアクセシブメントだ。

外はもう明るい。どうやら「結界」が強く作用する時間とはとづくに終わっているようだ。俺達は無事に「結界」から帰還出来たのだ

ろう。

壁に掛けられた時計を見れば、時刻は九時を過ぎていた。もう生徒はとつくに登校して授業が始まっている時間だが、三年は既に自由登校期間になっているので授業はない。精々未だ進路が決まっていな  
い人間が教師に相談しに来るぐらいだ。

とりあえずは保健室を抜け出してきつきと帰宅した方がいい。その判断してフランチエスカを引きき？がそうとした時、俺は彼女の異変に気付いた。

「……悪い、怖かっただろ」

彼女は、静かに泣いていた。瞳からぼろぼろと零れる雫はフランチエスカの感情の印だった。

微かに震えるその小さな身体に溜め込んでいた恐怖に、俺が起きた事で耐えられなくなったのかもしれない。

俺が気絶してから、俺を引き摺って保健室まで逃げてきて。恐怖を感じる夜を、自らが何度も殺されたこの校舎でたった一人で過ごしていたのだ。その恐怖は想像を絶するものだっただろう。

無理をさせてしまった。そんな事をさせたかったわけじゃない。あの時無理にでも引き返すべきだった。

だが、謝罪と後悔を籠めた俺の言葉を、フランチエスカは顔を上げて赤く腫らした目で俺の顔を見つめて否定する。

「違います……。あたし、確かに怖かったですけれど……」

服を強く掴まれて、すすり泣く声が漏れる。

「芳乃君がもう起きなかつたらどうしようって、死んじやつたらって……その方が、ずっと、怖くて……」

不安に耐える必要のない俺の腕の中で己の不安を言葉にして、吐き出して。

感情のままに泣いているこの少女を魔女と呼ぶなんて、昔の連中はどうかしている。

「逃げろって言ったのに立ち塞がったお前が言う事じゃない。お互い様だ」

心の内から漏れた素直な感想だった。

俺が殺され掛けたのも、それを庇おうとしたお前が危険に晒されたのも。

俺が死ねば、どうせお前は死を「反転」させて死ぬだろう。お前が死ねば、どうせその後俺も死んでいた。

順番が違うだけで、結果は何も変わらない。だから気にしていない。

—— 本当に、そうか？

ふと湧いた疑問を、頭の中から振り払う。今はそんな事どうでもいい。フランチエスカを慰める方が先決だ。

「あたしの我が儘で、芳乃君が危険な目にあって……」

「その我が儘に付き合うつて決めたのは俺だ。その結果も、何もかも、全部俺の責任だ」

お前は呼ばれただけなんだ。あのよく分からない怪しげな外套の男に、本当に身勝手な理由で呼ばれただけ。

だから、お前が責任を感じる必要はない。傷付いて泣く事なんてない。お前は幸せになって、笑っていけば——。

「……っ」

虫唾が走った。あの男と同じような事を考えようとする自分がそこに居る事に。

その苛立ちを自分の中で消化出来ないまま、状況は変わっていつてしまう。

まるで自分の城だと言わんばかりの遠慮のなさで、保健室の扉が開かれた。

「……おや、起きたんだね」

入室してきた男の顔を見て、俺はたった今まで抱えていた苛立ちとは別の苛立ちから舌打ちを返した。

男は俺の舌打ちに、「その調子なら、もう大丈夫みたいだね」と楽しそうに返してくる辺り、こいつとの妙な付き合いの長さを感じさせられて更に不機嫌になった。

男の存在に気付いたフランチエスカが、涙を拭いながら慌てて俺に説明をしようとする。

「あ、あの……こちらの方は、その……」

「知ってる。……残念ながら、よく知ってる」

「はは、その手厳しさも懐かしいね」

上桐悟。嘗てこの学園の夜を亡者の学園として創り上げた魔術師。かみきりやとる

今では協会に「魔力回路」を潰されて唯の一般人と化している。この学園の養護教諭として真面目に働いている事だろう。

俺としては胡散臭い存在にしか思えないが、生徒から人気がなかったわけじゃない。少し癖のある茶髪や幼そうに見える顔立ちから、教師としてはとっつき易い部類にあるらしい。

……こいつに異性として好意を持っていた人間だって、俺は知っている。

「いやあ、驚いたよ。いつも通りに出勤したら、保健室の鍵は開いているし。締め忘れたかな、と思って中に入ってみれば、よく知った顔がベッドで眠っていて、もう一人の見知った子が不安そうに手を握っていたんだから」

そんなこいつは、相手が俺であるのなら大抵の事には動じなくなってしまうらしい。まるで驚いていなさそうに、嘘くさい笑みを浮かべて言ってくる。

俺は上桐の介入で泣き止んでくれたフランチエスカを引き剥がして、ベッドの淵に座らせた。俺もその隣に座った事を確認すると、こちらへ歩きながら上桐は続けてくる。

「まあ、保健室を使うのは構わないんだけどね。深花君はこの学園の生徒だし、ランさん……いや、フランチエスカさんだって、この学園の生徒だろう？」

「いえ、その、あたしは……」

「卒業はしていないんだよね？　なら、生徒って事でいいんじゃないかな」

釈然としていなさそうなフランチエスカを「そういう事にしとけ」と宥める。

……それにしても、まあ。上桐も上桐で随分と友好的な対応を取るものだ。

フランチエスカは上桐の亡者の学園を根底から『反転』させた張本人だ。その事については同情の余地など一つもないのだが、当人からすれば忘れてしまいたい苦い記憶の筈だ。

その張本人を目の前にして、そして更に亡者の学園で敵対した俺が居て。こうして普通に話している事自体が奇跡に思える。

俺としては、こいつとはもう生徒と教師以上の会話をする気はなかったのだが。

そんな俺の考えを知ってか知らずか、上桐は「それで」と切り出した。

「どうしてこんな時間帯に保健室に？ ……いや、回りくどい真似は止しておこうか。何があったのかな？」

俺以外の生徒に評判の目を細めて問う上桐に、俺は舌打ちを返した。

答える気はない。だが、このまま黙っておいて下手に動かれるのも面倒だ。

余計な探りを入れられるぐらいなら、ここでしっかり話しておいた方が御し易いだろう。

「他言無用だ。誰にも言うな」

「分かったよ」

「誰にも、だ」

「……分かってるよ。誰にも、言わない」

こいつの聞き分けがいいのはいつもの事だが、今回ばかりは唯単に聞き分けたわけでもないだろう。

目が戻っている。とつくに失われた筈の、魔術師としての目だ。

舌打ちの代わりに溜息を一つ。それに連動してフランチエスカの苦笑い。……懐かしさを感じたのは、気のせいじゃない。

その懐古から目を背けるように、俺は目を閉じて今日の深夜から保健室に逃げ延びるまでを上桐に説明した。

『反転』の『結界』の中で、正体不明の外套の男がフランチエスカを待っていた事。外套の男はフランチエスカの素性を知っていて、再びフランチエスカを眠りに就かせようとしていた事。そして外套の

男は俺へ殺意を向け、更には「無干渉」を貫通して精神干渉を行った事。その後、恐らくはアクシデントで俺達に止めを刺せず、三つの光になって消えた事。

俺の知る限りの情報を話し終えた後、上桐は顎に手を当て、考えを纏めているようだった。

上桐ばかりに考え事をさせるのも腹が立つ。そもそもこいつは今回の件には無関係だ。事態が起きてからゆっくりと考える時間もなかったが、俺も状況を把握するべきだろう。

そうして始まった俺と上桐の思案が終わったのは殆ど同時だった。顔を上げて目が合う。俺は舌打ちをし、上桐は微笑んだ。

「順番に行こう。情報から察するに。深花君達を襲った外套の男は、きつと霊体だね」

「だろうな」

「……そうなんですか?」

体力の限界なのか俺の肩に体重を預けてきたフランチェスカに、俺は視線を向けずに頷いた。

「普通の人間があんな風に三つに分裂するかよ」

「そ、そうですね。あたし、靈感なんてないですよ? それなのに どうして……あ、そうか。『反転』……」

「そうだね。フランチェスカさんの『結界』の中では、不可視の霊体は可視の実体を得る」

正確には、この学園の昇降口を通った霊体でなければ性質は『反転』をしない。

屋上を直接目指すような事をすれば、霊体は霊体のままだ。

そして更に言えば、『結界』を張った本人は『結界』の影響を受けない。

「あそこじゃ霊体も実体も見分けがつかない。霊体だつて判別出来る 確固たる瞬間を見れたのは、運が良かったな。唯、問題は……」

「その霊体が誰なのか分からない、って事だね」

同じ疑問点を持っていた点は、腐っても元魔術師だと言うべきだろう。

あいつが霊体という所までいい。今更実体が無い相手くらいで騒ぎ立てるような神経は持ってない。

だが、そこから先の相手の正体を探る段階になれば、霊体である事が大きく足を引っ張ってくるのだ。

「外套の男の目的は、あいつの言う事を信じるなら、『フランチェスカⅡフリジメリカを慰霊塔の下に再び眠らせる』、『しんかよしの深花芳乃の殺害』の二つ」

「うーん……よく、分かりません。どうしてその二つが、あの人の目的なんでしょう」

「あいつはお前の素性を知っていた。現代ではお前の素性を知っている人間は殆ど居ないし、知っている人間は全てリストに載って身元が割れている。上桐も含めてな」

そう言つて上桐を睨みつけると、「そもそも僕はもう魔術を使えないから、何もしようがないんだけどね」と困ったような笑みで返された。

実際、魔術が使えるばこいつが犯人の可能性だつてあつた。まあ、流石に監視者が居ると分かっている領域で、何かを企む程間抜けでもないだろうが。

「そして、一応だがあいつはお前の事を案じていた」

「はい。あたしを傷付けないように、芳乃君の前から退いてほしがつたりしていました」

そう、随分と独善的な形だったが、あいつはお前の事を大切にしようとしていた。

そして決定的な証拠として、あいつの事を知っていた。俺と明日のお昼代で契約を交わし、亡者の学園の調査を共にした精霊の事を。

現代では知りえないフランチェスカの素性を知り、大切にしようとしており、あいつの事を知っている霊体。条件から考えれば、答えは一つしかない。

「あいつは亡者の学園に通っていた過去の人間だ。お前が生まれた時代と同じ、百四十年前の亡霊」

「百四十年前の……あの、芳乃君」

「何だ」

「あたし、あの人を見た事がある気がするんです。何時の時代かは分からないんですけど……」

今のフランチェスカにはこの時代で数ヶ月生きた記憶がある。更に、ほんの一部だがあいつの記憶も流れ込んでいる。

更に過去の記憶の最後にあれだけのショックを受けたフランチェスカが、その一瞬の記憶の時代を把握出来ないのは無理からぬ事だろう。

フランチェスカの既視感の報告により、俺も忘れていた事を思い出した。

外套の男に既視感を抱いたのは、フランチェスカだけじゃない。俺もだった。だが、俺の既視感の方は勘違いの可能性だってある。

状況から考えて外套の男は百四十年前の亡霊で間違いはない。余計な情報を口に出すのは憚られた。

だが、あいつが百四十年も前の亡霊だとすると、そこには大きな問題が一つある。

「外套の男は、百年以上前の魂の割には摩耗が少な過ぎるね」

上桐の言葉に俺は頷く。

意味が分からない様子で首を傾げるフランチェスカを見て、補足をする。

「肉体から切り離された魂は唯消耗するだけのエネルギーになるんだ。普通の人間なら半世紀もしない内に魂が摩耗しきるだろう。たとえ魔術師であつても、百四十年の摩耗には普通は耐えられない」

俺の補足を聞いて、フランチェスカは更に首を傾げた。

元々俺に体重を預けている関係上、どんだん肩に頭を擦り付ける格好になってくる。心臓に悪い。

「あの、あたしは……？」

「お前の場合は慰霊塔の下に肉体があつただろ。その肉体も、慰霊塔の周りに植えられたソメイヨシノからエネルギーを貰って維持が出来ていた。お前は唯眠ってただけだ」

「まあ、僕の都合で去年の九月頃に亡者の学園に登校してもらってい



ただけだね。本当に余計な事をしてしまった」

「それはお前が迂闊だっただけだろ」

上桐に事実を突きつければ、「その通りだね」と気まずそうに頬を掻いた。

鼻で笑って追撃してやると、隣の少女は「そうでしょうか」と異を唱えた。

「あたし達にとっては、余計な事なんかじゃありませんでした。上桐先生が亡者の学園を創ったから、あの子は芳乃君と出会えて、あたしは芳乃君と一緒に居る事が出来ています……」

小さく笑って、フランチェスカは上桐を見る。

「だから、ありがとうございます。上桐先生」

あいつが上桐に最後に見せた感情は怒りだった。亡者の学園の最後の夜に、あいつが初めてぶつけた激しい感情。

怒らなかった俺の代わりに怒ってくれたあいつと同じ姿から、今度は感謝の気持ちを伝えられる。

今の一言は、どんな罵倒よりも元魔術師には効いた事だろう。

事実その通りだったようだ。いつも物腰柔らかな優男の上桐が、苦虫を噛み潰したような表情を見せて、咳払いを一つした。

「とにかく、エネルギーが少ない霊体は存在の濃度が薄過ぎて、〃反転〃の性質を以てしても完全な実体を得る事は出来ないんだ。〃反転〃の〃結界〃の中では、生前刻まれた行動を繰り返すだけの緑色の輪郭だったね」

「あいつ等は亡者の学園の調査の中で接触する事が出来なかった。完全にモブだったな」

フランチェスカが「モブ……？」と呟いていた。どうやらまだ日本語に馴染んだ英語には慣れていないようだ。

フランチェスカに『モブ』の意味を教えている間に、上桐は何かしらの仮説を立て始めたらしい。その思考の速さは、流石元死霊専門の魔術師と言うべきだろう。魔術を使えなくなっても、その知識を失ったわけではない。

「となると……うん。やっぱり、こんな感じじゃないかな」

少しして、上桐は仮説を立て終えたようだ。

「一応聞いとく。さっさと話せ」

「お願いします」

足を組んで、膝の上に頬杖を突いて話を聞く体勢を取った俺と、俺に体重を預けたまま話を聞こうとするフランチェスカ。

そんな俺達を見て上桐は小さな笑みを一つ浮かべ、仮説を説く為に口を開いた。

## 5. 二人の決意

「彼が遙か過去の霊体でありながら視認が出来る程の濃度を持っているのは、どこかからエネルギーを調達しているからだね」

勿体つけて言った割には予想通りだった悟の言葉に、芳乃は溜息だけで返した。

嘗て幽霊が存在を維持する方法を彼女へ説明した芳乃にとっては言われるまでもない事だった。

対照的にフランチェスカは何とか理解しようと気合を入れている。それが、記憶の中の彼女とフランチェスカが違う証でもあった。

そのどこかとはどこだ。そう言いたげに芳乃が上桐をじとりと睨むと、分かっていると言わんばかりに続く。

「エネルギーの調達場所はこの学園の慰霊塔からだ、僕は思ってる」  
「慰霊塔……」

フランチェスカは知らず眩く。  
自らが眠りに就いていた場所がエネルギーの供給源になっているかもしれない可能性は、彼女を複雑な心境に陥らせた。

何しろ慰霊塔でエネルギーに使える存在と言えば、外套の男の正体の予測と同じ、百四十年前の霊達なのだ。

「あれが慰霊塔の連中だとして、外套の男が三つに分かれた理由はどう説明する」

「それも仮説が立っているよ。……そうだな、例えばとすれば紙かな」  
「紙……ですか？」

眩きに元魔術師は頷き、自らの事務机の上にある紙を一枚取ってそれを二人へ見せる。

「この紙を魂だとして。勿論魂は普通の人間には見えないけれど、そもそもこの薄さじゃあ、角度によつては見えないよね」

「はい……見えないかも、しれません」

何となく頷くフランチェスカの隣で、何となく話の概要を掴んだ芳乃が頬杖に掛ける体重を深くした。

その目は面倒そうに細められ、窓の外に向けられた。長い話にな

る。魔術師としての経験がそう予測させた。

「この紙が見えなくなる理由は、紙が薄過ぎるからだね。これが魂の摩耗が進んだ霊体の状態だ。元々の存在が薄過ぎるから、『反転』するも何もないよね」

「そうですね……幾らひっくり返しても、姿形は変わりません」

「でも一応はその紙の性質自体は『反転』される。『普通の人間には見えない』って性質が『反転』され、俺達にもその朧げな存在が視認出来るようになる。それが亡者の学園に通っていた緑色の輪郭達の絡繰りだ」

「そうだったんですね……あたし、直接見た事はありませんけど、見た記憶はあります」

フランチエスカの言葉に、芳乃は「そうだったな」とぼつが悪そうに目を逸らした。

フランチエスカの中にあるランチの記憶。それを語るフランチエスカを見る度に、芳乃の心が乱れる。

寂しさを隠すように目を逸らす芳乃の服の袖をフランチエスカが強く握った事にも、芳乃は気付かない。

「なら、この紙が見えるようにするにはどうすればいいか。簡単さ。厚みを持たせればいい」

「厚みって……その紙って、厚くなるんですか？」

「紙自体をどうにかするんじゃない。その紙に別の紙を重ねていけば、一枚の厚い紙に見れなくもないだろ」

芳乃はフランチエスカの疑問に目を逸らしたまま答える。

何となく、だが。芳乃はフランチエスカの疑問を答える立場を奪われる事を嫌っていた。

「慰霊塔の霊達を束ね、自己の存在濃度を上げる。それがエネルギーを調達するっていう事。人間で言えば、食べ物を食べる事と一緒に」

「そのエネルギーを調達して存在の濃度を上げる行為が、三つに分かれた事とどういった関係が？」

「食べ物と一緒にだって言ったろ。大方、影響を受けるんだらう」

芳乃の推測が当たっていたのか、芳乃の視線を受け取った上桐が「どうぞ」と続きを促す。

「身体に悪いものを食べ続けたら身体は不調を抱えるだろ」

「あたし、この時代で目覚めてから身体に悪いものを食べてないです。お野菜もお肉も、バランス良く食べるように芳乃君に言われましたから」

「……ああ、そうだったな」

そういえばそんな事言った気がする、と芳乃は話の腰を折られながらも思い出した。

能天気な言葉に真面に受け答えをしてしまったのは、その表情が呆れてしまう程幸せそうだったからか。

「とにかく、慰霊塔の連中を束ねて足りない分のエネルギーを補っていたのなら、霊達の念の影響を直接受ける事になる。それだけの念を抱え続けていたのなら、実体のないあいつの存在は余程安定しないものになっていた筈だ」

「自分以外の魂を抱え続ける事で辛うじて保っていた存在が、何かのショックがきっかけで瓦解した。三つに分かれたのは、恐らくはそれぞれの霊が抱えていた念——感情が大まかに分けて三種類だったからじゃないかと、僕は思う」

「一体、どんな感情が……？」

フランチエスカの言葉に、『そこまでは分からない』と告げるように二人は目を逸らした。

だが、動きは同じでも二人の思惑は同じではない。

悟はそこまでフランチエスカの疑問に答える義理がなかったから。そして芳乃は、己の予想をフランチエスカに告げる事を憚ったから。根本的にフランチエスカに抱く感情が、二人は違っていた。

「……まあ、霊達の念の影響で俺達を襲った可能性だつてあるけど。あいつは分裂したし、仮に復活したとしても校舎の中じゃなければ満足に活動出来ない筈だ」

「そうだね。君達をこの校舎で待っていたのなら、その推測は合っているとと思うよ。態々会いに行かなければ、きっと二度と会う事もない

んじゃないかな」

「そう……なんですか」

そう発した事が皮切りの様に、フランチエスカの身体が電池が切れ  
たようにゆらりと揺れた。

自らの身体に掛けられていた体重の重心がずれた事を察した芳乃  
が反射的にそれを支える。

支えられたフランチエスカは、力を籠める事もなくそのままだらり  
と芳乃の腕の中に収まっていた。

芳乃を見上げるその瞳は臍気に潤み、口元は微かに端が開いてい  
る。その表情の意味を読み取る事が、普段から生活を共にしている芳  
乃には出来た。

「……体力切れだな」

「みたいです……」

力なく答えるフランチエスカに、芳乃は呆れ気味ながらも優しく頷  
いた。

フランチエスカが目覚めてからの一ヶ月程の間に何度もあつた事  
だった。

まだ体力が戻りきっていない頃、夜間の散歩の途中でふらりと芳乃  
へ倒れ込む。それを芳乃が支え、自宅まで背負われる。

今では体力不足のレベルは脱した筈だが、丸一日以上起きている事  
は負担が大きかったらしい。

こうなれば芳乃の取れる手段は一つしかない。

「帰るぞ。敷地から目立たず脱出出来る場所を探ってくるから、少し  
待ってろ」

「敷地から出ようとするのに人目を気にする学生も中々居ないだろう  
ね。僕も着いていくよ。その方がフォローも利くしね」

フランチエスカのゴシックよりは目立たないが、芳乃の格好も上着  
を着て誤魔化しているだけでよく見れば制服ではない事は分かって  
しまう。

暗示で多少以上は誤魔化せるとしても、そもそもの疑いは少ない方  
がいいのは明らかだ。

それを理解している芳乃は、『冗談じゃない』とは思いながらもフランチェスカをベッドに横たわらせてから立ち上がる。

フランチェスカと悟を一緒にするよりかはましだと思っっている事も、許諾へと繋がったのだろう。

「直ぐ戻ってくる。背負って帰ってやるから、少し休んでろ」

「はい……待ってますね」

「……行くぞ、上桐」

上着のボタンを閉めて上半身の服装を隠した後、芳乃は保健室を後にする。

廊下に出た後に、後を追ってきた悟へ確認を取った。

「確か今の時間、グラウンドは体育で使われてたよな」

「そうだね。グラウンドの塀を乗り越えて帰るのは、人目に付き過ぎるかな」

「だとすれば、校門から堂々と帰った方が逆に怪しまれないか……」

「なら、僕が見送りに付き添うよ。具合が悪くなった事にすれば怪しまれる事もないだろうしね」

そうして昇降口から校門までの道のりの人目を確認しようとした芳乃は、保健室の直ぐ隣にある職員玄関から誰かの気配を感じた。

振り返って気配の主を視界に収めると、職員から来賓用のバッジを受け取り、胸に着けて校内の階段へ歩き出す男性の姿があった。

いや、男性と言うよりは男子と言った方がより正確だろう。何しろ身に纏っているのは別の学校の制服で、身長や恰幅等は芳乃よりもずっと幼く見えた。

芳乃の視線に気付いたのか、男子はぺこりと会釈をして、そそくさと階段を上がっていった。

「芳乃君、未来の後輩を怖がらせちゃいけないよ」

「後輩？ あいつ、うちの制服着てなかったぞ……ああ、未来ってそういう事か」

悟の言葉の意味を理解した芳乃は、「もう会わないから安心しろって伝えとけ」と面倒そうに前髪に手を通した。

つまり、あの男子は来年入学する新入生なのだろう。あと二週間程で卒業をする芳乃とは縁のない人間だ。

悟はそんなドライな反応をいつもの反応で柔和に笑って流す。

「彼は入学式で新入生代表のスピーチをするんだ。生徒会長を経験しているし、入試の結果も優秀だったからね」

「ふうん。行儀も頭もいいんだな。お前の所に世話になったりはしなさそうではなかったじゃないか」

それは悟にとってか彼にとってか、どちらとも取れそうなニュアンスで言う芳乃に、悟は本心からの苦笑いを返した。

こういった皮肉さ加減は芳乃元来のものだった。当然悟にも経験はある。寧ろ他人よりずっと多く経験をしており、以前——染衣そめいさくら桜が存命だった頃には日常の一部にもなっていた。

そんな当たり前を今漸く感じ取ったと思ったのは、恐らく気のせいではないのだろう。

芳乃が数々の出来事の末に変わったから、だけではない。芳乃自身が無意識の内に、フランチエスカの前ではそういった面を抑制をしている。

「……何だよ」

分析するような悟の視線に気付いたのか、芳乃は鉄色の目で不機嫌そうに睨む。

「何でもないよ。君は大切な人には本当に不器用なんだなって、思っただけさ。恐れずにもっと素直になれば、話は簡単なのにね」

「は、流石は惚れた女一人の為に亡霊だらけの学園を創った男だ。桜が死んだ後で逆に良かったかもな、ストーカーに走ってもおかしくなかっただろ、お前の極端さじゃ」

芳乃は言い逃げるように歩調を早める。置き去りにされぬように同じく歩調を早めた悟は、決して隣に並ぶ事はなく一步後ろから声を掛ける。

「それを言われると弱いな。そういえば、ここ暫くずっと誰かに見られている気がするんだ。もしかしたら、僕も生徒からストーカーされているのかな」



「知るか。そんな相手が居たとして、今度は大切にやってもらいたいじゃないか」



「芳乃君。一つ……お願いがあるんです」

「どうせ、外套の男の真意を知りたいって言うんだろ」

人通りの少なかった校舎裏の塀を飛び越えて学園の敷地を脱出した帰り道。

背負っているフランチェスカの言葉を最後まで待たずして、俺はそう返した。

フランチェスカは驚いたように「分かってたんですか?」と問うてくる。

「分かっているに決まっている。今回の事は、お前にとって不可解な事が多過ぎるだろ。見覚えがある奴に呼ばれてる気がして、襲われ掛けて。それもそいつの意思なのかどうか怪しくて。知りたいって思うのは、おかしい事じゃない」

実際、あいつもそうだった。ゴールがどこかも分からない亡者の学園の真実から目を背ける事を良しとせず、足を踏み入れていった。

ああ、違うな。俺はフランチェスカの事を分かっていたんじゃないんだ。どうしたって、俺とこいつの間にはあいつが付き纏う。

「……いいですか?」

縋るように微かに腕に力を籠めて訊いてくる。

フランチェスカは俺と一緒に夜に出歩く事はままならない。外套の男の真意を探る為に学園に行くのならば、必然俺も付き合う事になる。

たとえばそうでなくとも、フランチェスカを一人で夜の学園に向かわせる事なんて出来る筈もない。

目下外套の男はフランチェスカを狙っている。一人で行くのはあまりにも危険過ぎた。

止めるべきだ。そんな事、子供でも分かる。

——なのに。

「……いいよ。一緒に行こう」

俺の心は、理性とは正反対の言葉を告げる。

「……本当ですか？ 芳乃君、あんなに危ない目に遭ったのに」

「それはお前も一緒だろ。本音を言えば行かせたくなんてない。知ればお前が傷付く真実だってあるかもしれない。あんな奴放っておけばいい。……でも、出来ないんだろ」

「……はい」

フランチェスカはきつと外套の男の真意以上に、慰霊塔の連中を束ねてまで存在を維持しようとした外套の男の動機を気に掛けているのだろう。

外套の男はフランチェスカの事をずっと気に掛けていた。友達なんて居ない筈のフランチェスカを気に掛け、自らが歪む程の念を抱え込むリスクを冒してまで存在の濃度を上げ、彼女が目覚めてから待ち続けていた男の気持ちを、無視なんて出来ない。

そんなフランチェスカの律義さを、俺は否定出来なかった。

「……それに、あの時は黙ってたけど、俺もあの男を見た事がある気がするんだ」

「……芳乃君も、ですか？」

「唯、あの男と言うよりかはあの服装と言うか……。正直そこら辺ははっきりしてない」

だが、既視感を覚える程度には見た事があるのだろう。

そう多くはない回数。だけど記憶から消えていくには最近過ぎる情報。

それとフランチェスカが抱いた既視感。きつとそこに、外套の男の素性のヒントがある。

「あの野郎には撤回させてない事もあるし、言つてやりたい事もあるしな。会わなきゃ会わないでそれでいいし、一人よりは安全だろ」

「そもそもあたし、芳乃君と一緒にじゃなきゃお外に出れませんから……」

苦笑いを浮かべながら告げるフランチェスカの口振りには力が無

い。体力切れであるから当然なのだが、そろそろ言葉の輪郭も曖昧になり始めていた。

「家に帰ったら直ぐ寝ろ。これからは夜遅くなるんだから」

「……嫌です」

何気なく言った言葉だが、まさか否定されるとは思わなかった。

「どうした？ 何かやる事あったか？ 秋月さんに連絡入れといてやるから、手伝いの事は気にしなくて——」

「お昼……食べます」

「昼？」

意外な要望に間抜けな声が出たが、フランチエスカとしては大真面目な問題のようだった。

そんなに腹が減っていたのか、と思ったがそうでもないらしい。

半分意識が無いような様子なのに、そこから先の言葉はやけにはつきり聞こえた。

「だって……これだけは、あたしじゃないと出来ない事ですから」

比べる相手が誰なのか。それは問うまでもなかった。

「きつと……これからコートの人を調べる中で、あたしはランチちゃんの事を思い出します。……これからする事は、ランチちゃんが芳乃君とした事とよく似ている気がしますから」

その可能性はないと言い切れない。

確かに、これからやる外套の男の調査は亡者の学園の調査と似ている。

模倣を重ねれば、似たような状況から記憶が刺激されるかもしれない。かつた。

たとえばそれが自分の脳にはない情報だったとしても、あいつを呼び起こす奇跡を実際にフランチエスカは起こしている。

「あたしがランになっていくとしても……芳乃君とご飯を食べるのは、あたしです」

「……分かった」

それがフランチエスカのやりたい事なら、俺に止める権利は無い。誰の為なのかを知っている身としては、尚更の事。

フランチェスカの選択を受け止めて、フランチェスカという一人の少女の存在を見つめていく事が、俺がしてやれる事だ。

だけどそれは言い訳でしかなく、外套の男が言っていた通り、調査を通じてあいつとの想い出をなぞろうとしているだけなのかもしれない。

……だとしても。

「変わっていくお前の事は、俺が憶えておく」

「……ありがとうございます」

嬉しそうに、そして切なそうに礼を言うフランチェスカの気持ちだけは、誰にも穢させない。

## 6. 伝える事

「それで、今日はこれから学園の調査ですか？」

街灯も届かないような路地裏に繋がる広間で、うつかり時刻を確認する為に手に持っていた携帯を落としそうになった。

時刻は夜の十時過ぎ。あれから帰宅した俺とフランチエスカは昼食という名の鍋を食べ、一時の休息を得た。

休息と言っても、フランチエスカは体力の限界だったので、昼食後には倒れるように眠ってしまった。俺と一緒になければ眠る事も出来ない彼女の傍で、俺は秋月さんに電話を掛けた。

内容は勿論、フランチエスカの具合が良くないので今日の手伝いには行けない、というものだ。日中は秋月さんの手伝いをしているフランチエスカだが、疲弊している状態で無理なんてさせられない。

秋月さんからは快く了解が返ってきた。元々、『慈愛』という言葉が似合う人だ。具合が悪い人間に無理をさせるような事はしない。

そして俺は俺で夜の仕事を手伝う事になっている。フランチエスカの身の安全を確保するのに力を貸してもらった対価だ。

昼の仕事は書類や情報の整理といった安全な仕事なので、安心してフランチエスカに任せられる。

だが、夜になるとそうも行かない事が殆どだ。昼に整理した情報に元に、魔術師の工房に乗り込んだり、そもそも人間なのかも分からない通り魔的な何かを誘き出す為に一人裏路地を歩いたり、正直命の保証はなかった。

俺は魔術関連の事件を解決する『制陰協会』に属する、対魔術師用の魔術師だ。

そうは言っても、俺の専門は自分の『属性』を活かした干渉耐性を武器にした、電光石火の制圧だ。暗示や洗脳といった、相手に干渉する事で対象をどうにするタイプの魔術師は、得てして直接の戦闘能力は大した事はない。

その干渉に対する対策がなければ厄介なのは間違いないが、俺には『無干渉』という大きなアドバンテージがある。干渉出来ない相

手に直面して冷静さを失った相手ぐらい、”身体能力強化”で制圧する事は容易い。

まあ、秋月さんが担当する連中は殆どばりばりの武闘派連中なので、この方法は通じないのだが。何とか応戦しながら秋月さんが一網打尽にするのを待つばかりである。

秋月さんにそう言われたのは、今回も命拾いした、と安堵しながら、足元に転がっている数名の意識が無い魔術師達の数を数えつつ携帯を見ていた時の事だった。

「……何故それを？」

秋月さん相手にしらばっくれても無駄なのは分かりきっている。

俺は大人しく認めつつ、秋月さんの方を見ながら質問をした。

秋月さん——秋月神無は、一言で言えば中性的な美人だった。

肌は雪の様に白く、項の辺りで一つに結ばれた蒼白の髪は、月明かりに明確な色があればこんな感じかもしれない、と思う程、仄かに煌めいて見える。

微かに垂れる白い瞳は優し気で、秋月さんの印象を一層柔らかくしていた。艶やかな唇は大抵は笑みを形作っており、そこから発される声音を聞くとならしくなく和んでしまう。

異性という存在の容姿を詳しく見た事が殆どない俺でさえこうなのだから、普通の人間が見れば、見惚れる事は避けられないのだろう。これでいて『強い』という言葉では生温い程強いのだから恐ろしい。そんな秋月さんは建物と建物の間に出来た路地裏からひよっこり姿を現しながら、いつも通りの柔らかな表情で何て事ないように言うてくる。

「お見通しってわけじゃありませんよ。唯、深花君達を保護した方から連絡がありました」

そう言われて、思いつくのは上桐しか居ない。

あの野郎、他言無用だと言った筈なのに、こうも簡単に喋るとは。

俺の不満が顔に出ていたのか、秋月さんはこちらを宥めるように笑い掛ける。

「あの人と話したんじゃないやありません。唯聞いてたんですよ、電話で

ずつと」

「電話？ ……そうか、あの狸教師、最初から通話を繋いで話をしてやがったのか」

俺の予想は当たっていたらしく、秋月さんは『正解です』と頷いた。「でも、上桐さんを責めないであげてください。元々は二人の事を心配して、連絡をしてきてくれたんですから」

「……分かりましたよ。そのまま通話を繋げて事情を聴こうとしたのは秋月さんって事ですね」

「そうです。ですので、嫌うなら私です」

そんな事を言われても、秋月さんを嫌う事など出来る筈もない。

何しろこちらには返しきれない恩がある。そもそも事情を盗み聞きをしようとしたのだから、俺達の事を心配している故の行動だろう。

俺だけならともかく、ランチエスカの事まで心配してくれている相手の事を悪く思うのは無理がある。

だが、それはそれとして、少し不味い事になったのは事実だ。よりにもよって秋月さんに聞かれてしまうとは。

秋月さん自身も、俺がこの事を誰にも話す気がなかった事に気付いているだろう。

そして、秘密を抱える意味も、きつと察しが付いている。秋月さんは困ったように笑って、優しい顔で俺を見上げる。

「ランチエスカさんの危険性を、協会の人間に知られたくなかったんですよね」

こうまで凶星を指されては、秋月さん相手でなくとも認めざるを得なかった。

俺は誤魔化す事なく頷いた。秋月さんにはそれで理由の全てが伝わただろう。

協会にとつて、ランチエスカは嘗て討伐した魔女でしかない。

それこそ俺が亡者の学園の事件を解決した功績や、その中でのあいつの活躍、そして協会内で発言権を持つ秋月さんの声を総動員して、漸く身の自由を得られた程だ。それ程までにランチエスカの「反

「転」は危険視され、管理されるべきだと考えられている。

フランチェスカという「反転の魔女」が狙われたという事は、フランチェスカの「反転」が狙いかどうかは関係なく、彼女の存在そのものが危ぶまれる事に繋がってくるのだ。

だから、協会の人間には誰にも知られてはいけなかったのだ。たとえそれが秋月さんが相手だとしても。

だが、思いつめていた俺に対して、秋月さんの答えはおよそ協会の人間とは思えないものだった。

「さて、深花君が何を気にしているのかよく分かりませんねえ。協会の人間なんてどこに居るんでしょうか。ここに居るのはお仕事が終わった秋月神無あきつきかなですよ？」

ぐるり、と辺りを見回して、秋月さんは悪戯っぽく笑ってみせた。どうやら、知らないふりをしてくれるらしい。足元に転がっている魔術師達はどう説明を付けるのか気になるが、この際無視でいいだろう。

……だが、俺は黙っていてもらう対価を持ち合わせていない。

「何をすれば、いいですか」

手札を持っていないあまり訊いてしまうと、呆れたような言葉が返ってくる。

「深花君は相手の善意に対して慣れてないですね。貰えるものは貰っておいた方が、人生楽ですよ？」

俺の肩を小突いてそう言うと、秋月さんは本当に優し気な目で俺を見上げる。

冷酷に敵を追い詰めていくような恐ろしい瞬間なんて幾らでも目にしてる筈なのに、何故だかその表情が秋月さんの素顔な気がした。

それがあまりにも自然で、受け入れるのが当然だと思わされて。

慣れないまま「ありがとうございます」と返すと、おかしそうに「不器用ですなえ」と笑われた。

「大切にしたいって気持ち、上手く伝えられないんですね。自分にも、相手にも」



上桐にも言われた事だ。あいつに言われただけなら否定してやったのだが、秋月さんに言われてしまうと流石に認めざるを得ないだろう。

どうせ桜にも、あいつにも思われていたんだろう。深花しんか芳乃よしのは不器用な人間だという評価はきつと正しい。

「でも、下手でも深花君なりに伝えようとしているんですね。フランチェスカさんからよく聞いてますよ」

「……あいつ、変な事喋ってないだろうな」

「色々聞いてますよ。……主に目覚めてから直ぐの事とか」

「……もつとちゃんと口止めしとくんでした」

このにやつき具合から鑑みて、フランチェスカの下着の事に違いはない。

何しろフランチェスカが生きていた時代には上の下着など存在していなかったが、現代で生きる上ではそうはいかない。

当然俺には馴染みが無く、フランチェスカ自身はそもそも存在をよく知らない。

フランチェスカの身の回りの衣類を揃える点において、俺達二人に真つ先に立ちはだかった壁だった。

身近の頼れる女性——母親か秋月さん、どちらに訊くか、唐突に現れた究極の選択。

最終的に母親に頼る事にしたのだが、フランチェスカの人見知りのせいで会う事は出来ず知識だけ与えられ、実際の測定と購入に関しては俺が付き添う破目になった。

着用に関しては何とか自力で出来たので本当に安堵したが、出来なかったら今度こそ秋月さんの出番だっただろう。

「そうやって身の回りの事をちゃんとフォローしてあげる優しさは、ちゃんとフランチェスカさんに届いています。だってあんなに嬉しそうに話すんですから」

「……そうですか」

それはお互い様だろう。俺だってフランチェスカが変わろうとしている理由を言われた事はないが、誰の為なのかは分かっている。

こうまで通じ合いながら、こんなにもお互い上手いかなければ、不器用と言われても仕方ない。

「まあ、二人の事は二人自身で決める事だと思えますから、この話はこれぐらいにしまして。解決するまではフランチエスカさんのお手伝いはお休みつて事でいいんですよね？」

「そうしていただけるならありがたいんですけど、大丈夫なんですか？」

「問題ありませんよ。いつも一人で仕事をしているのが少し寂しいので手伝ってもらっていただけです。また会える日を楽しみに待っています、と伝えておいてください」

そんな寂しいのであれば、協会の人間に頼めば幾らでも一緒にやってくれそうではあるが、そうも行かないのだろう。

秋月さんの家系は「四季家」と呼ばれる協会の創設者の一角である。秋月さんの協会内の発言権も、彼女自身の功績に加えて、家柄によって保たれている部分が多い。

俺自身こうやって手伝っていても、深花家が秋月家とのコネクションを持つとしている、という見方は避けられない。

秋月さん自身がそれを分かっている、気軽においそれと頼むわけにはいかないのだった。派閥と言うのはどこの組織でも面倒なものだ。

自分の事はどうだっていいのか、秋月さんは咳払いを一つして人差し指を立てて、得意気にこんな事を言ってきた。

「それでは、不器用な深花君に一つアドバイスです。もっとしっかり気持ちを伝えたいのなら、先ず理由を見つけましょう」

「理由？」

「そうです。フランチエスカさんを大切にしたい理由、ですよ。小難しい理屈じゃなくて、ちゃんとした理由を見つけてくださいね」

それは俺にとって最も難しい事ではないだろうか。魔術師に理屈を捨てるとは酷な事を言う。

まあ、あの秋月さんが折角言ってくれた事だ。事件の調査をしている中で、意識しておいて間違いはないのだろう。

ともかく、これで大方の問題はクリアした。これからどうなるかは俺達次第。

フランチエスカがランに変わっていくのかも。俺がフランチエスカとどう向き合っていくのかも。俺達自身に懸かっている。



「……あの、芳乃君。今日の晩御飯は美味しかったですか？」

これから敵が潜んでいるかもしれない場所に向かうというのに、随分と呑気な質問だった。

あれから手伝いを終えて秋月さんと別れ、食事を済ませれば深夜零時前。そろそろ頃合いなので二人揃って家を出て、穂又<sup>ほまた</sup>学園を目指していた。

家を出てから、俺達の間には会話はなかった。俺の服の袖を掴んで周囲を警戒しながら歩いているのは変わらないのだが、今日の様子は普段の怯えた感じとはまた違い、様子を伺うように俺の事を見つめ続けている。

何か心配させるような事でもあったか、と事情を探る為に会話を切り口を探していたのだが、先に会話を切り出したのはフランチエスカで、会話の出だしはそんなものだった。

「……もしかして、ずっとそれを気にしてたのか？」

「そ、そうですけど」

はあ、と安堵と呆れを隠さずに溜息を一つ。それに気付いたフランチエスカが、珍しく拗ねた様子で頬を膨らませた。

「だって、今日の晩御飯は初めて作ったんですもん。お口に合ったか気になるじゃないですか」

「別にシチューなら——」

食えない物なんてそうそうない、と答えようとして、先程の秋月さんとのやり取りを思い出した。

……伝える、か。確かにこういった感想を自発的に伝えた事はそう多くない。

今の様にフランチエスカが訊いてきて、俺はそれに答えるだけ。答えるにしても、今口を滑らせかけたようなぶつきらぼう。

確かにこれでは、伝わるものも伝わらないだろう。

「……初めて作ってたって言ったな。何で知ったんだ？」

「え、と。お昼のテレビでやってたんです。芳乃君、いつもお鍋ばかり食べてますけれど、こういうのも好きかなあ……って」

「まあ、そうだな。シチューも嫌いじゃない。……今日のやつも、美味しかったよ」

「本当ですか……？」

さっきまで拗ねていた様子はどこへやら、フランチエスカは期待を込めた瞳で控えめに訊いてくる。

「本当だよ」と返せば、また喜びを控えめに表現するようにはにかなだ。

確かに、伝えるというのは大事な事のように。こうして相手と生活をしているのなら尚更。

学園に近付いてきた。これなら着く頃には丁度“結界”が作動しているだろう。

遂に始まるのだ。俺とフランチエスカが行う、あの男の真意を探る夜が。

「……これから外套の男の調査をしていく中で、俺にも一個目的が出来た」

「芳乃君にも、ですか？」

「まあ、今後の為に必要だと思ふ事だ。お前みたいに誰かの為なんて大層な目的じゃない」

だから訊くな、と目線で告げると、フランチエスカは大きく首を振って了解した。

詳しい事は何も伝えていないのに、俺の目的を尊重してくれる。そんな彼女を大切にしたい理由を、俺はこの夜の中で見つけよう。

笑えてくる話だ。桜やあいつが居なくなつて、今更そういう人間らしいものを探そうとしている。

何より、そういった人間らしさを探そうとする自分を悪くないと

思っている自分が居る。

「……魔術師なんてつまらない生き方だしな」

「そう……なんですか。神無さんは色んな事が出来て、とっても楽しそうでしたけど」

「そういう事じゃない。……ま、秋月さんはどつちの意味でも楽しそうなのは確かだ」

だが、それは秋月さんの答えだ。

俺は俺だけの理由を、フランチェスカと共に挑む夜の中で見つけてみせる。

「とにかく。俺の目的はついで程度に考えて、お前はお前の目的を忘れるなよ、フランチェスカ」

「はい。……ですから、変わっていくあたしの事、憶えておいてくださいね」

言われるまでもない事だ。それこそ大きく頷いて肯定すると、フランチェスカは嬉しさと切なさが見え交ぜになった笑みを浮かべた。

それはフランチェスカだけが見せる、彼女だけの笑顔だった。

## 8. 恨みの外套

校舎の中の様子は昨日と変わりはない。おかしい魔法が充満している様子も、空気感が変わっていない様子もない。

廊下の電気も相変わらず点いていない。数メートル先も覚束ない闇と淡い月明かりに支配された空間。緑の輪郭も存在しない。

もうこの校舎に、『亡者の学園』としての側面は残っていない。それだけは変わらない事実だった。

同じようにきよろきよろと周囲を見渡していたフランチェスカが、俺の顔を見上げた。どうやらフランチェスカも同じ見のようだ。

フランチェスカの様子は昨日よりは少しだけましになっていたが、それでも緊張が解けているわけではない。呼吸は浅く、顔色も若干悪い。こうして止まっているのは得策ではない。

「じゃあ、先ずはどこに行く。外套の男を探すにしろ、ここに居続ければしょうがないだろ」

「……そうですね」

フランチェスカの気を紛らわす為にも行く先を問うと、そつと目を閉じて、何かを感じ取るように静かに佇む。

魔法使いである彼女は、俺の様に頭で考えるよりかは、自らの感覚に頼って行動を決めたがる傾向があるのだろう。

これは俺にはない特徴だ。以前の俺なら魅力を感じるかどうかは怪しいところだが、今は不思議と信頼出来た。

それから五秒程。自分の中の感覚が答えをくれたのか、フランチェスカは目を開ける。

「確か、三……でしたよね」

「……外套の男が分裂した数がか？」

外套の男は自らを包んだ光ごと、風船が膨張しきるように三つに分裂した。

それは確かに重要な情報ではあるが、つい昨日の事をフランチェスカが忘れる筈もない。

何故その事を確認してきたのか疑問に思っていると、自らの質問の

意図が正しく伝わっていない事に気付いたフランチェスカが首を横に振る。

「亡者の学園に誘われた、この生徒さん達の数です」

「……ああ」

フランチェスカはあいつの記憶を完全ではないが読み取る事が出来る。

完全ではない故に細かい事は抜けているが、亡者の学園の事の顛末ぐらいなら理解しているようだ。

「えーつと……七不思議って、どんな人達なんでしたっけ」

そして細かい事は抜けているので、こうした事は俺が補足していく事になる。

説明と補足はあいつのせいで慣れたものだ。意識するより先に、俺は口を開いていた。

「出来事の順番から言うと、『反転する魔女』、『夢に誘う天牛』、『

月に咲く死垂桜』、『回想するソメイヨシノ』、『林檎を剥く

ジャックナイフ』、『童話に還るアリス』、『走り続けるスプリン

ター』でいいのか」

「『反転する魔女』はあたしの事ですよね。『夢に誘う天牛』は上

桐先生、『月に咲く死垂桜』が桜さん、『回想するソメイヨシノ』が

芳乃君……でいいですよね」

「ああ。残りの三人は、本来であればここに来る筈が無かった被害者だ。魔術や魔法なんてオカルトとは無縁の、完全な一般人だよ」

三葉恵理、蓬生和佳、そして 月島志希。それぞれ恋の悩みを抱えて

いた彼女達はその悩みにつけ入れられ、桜の友人となる存在——七不思議として亡者の学園に精神だけを誘われた。

今ではそれぞれの悩みに答えを出し、前に歩み始めている。全部、あいつが言葉で想いを伝えた結果だ。

「その人達が居た場所……家庭科室、図書室、グラウンド。そこに、きつと居ます」

「ものが見事に焼き回しだな。……何が理由だ」

三つに分かれた光が、亡者の学園の被害者である三人が根城として

いた場所に居る。偶然にしては出来過ぎだ。

だが、フランチェスカは頷いている。彼女の感覚はそこに居ると言っている。魔法使いの感覚を信じると決めた以上、俺はそれに従おう。

「分かった。一番近いのは真後ろのグラウンドだけど……ま、ここは家庭科室からだろうな」

「ですね。ランチちゃんとの思い出もなぞっていききたいですから」

気合を入れるように両手を胸の前で握るのを見れば、一先ずはもう平気なようだと思えた。

……思い出をなぞるのなら、これを忘れてはいけないうらう。

「フランチェスカ」

名を呼ばれたフランチェスカに、俺はポケットの中から取り出したあるものを渡す。

「これって……」

「なぞるなら、これは外せないだらう」

明日のお昼代。あいつが契約の対価に選んだ、明日を生きる為の希望。

フランチェスカに対しても渡してきたものだ。だけど、そのお昼代には何の意味もなかった。

唯の明日のお昼代。誰もが持っている何の変哲もない硬貨。物質としては何の効果も持たない。

それをこうして嘗てあいつに渡していたように渡す事で、フランチェスカの中には何が生まれるのだらう。

いつも貰っているくせに、まるで宝物を手に入れたように大切そうに握り締める彼女を見て、そんな事を思う。

「ありがとうございます、……」

礼の後の言葉は唇だけで紡がれ、声にはならない。

しかし、俺には唇の動きだけで内容が分かってしまった。たった一週間の間に、数えきれない程呼ばれた名前だったから。

「……行くぞ」

「は、は、は」



記憶を断ち切るように足を進めた俺に、フランチエスカは慌てて着いてくる。

そうして二人並んで歩き出して目的地に向かう。特別棟に行くには渡り廊下を渡らなければならぬので、先ず二階に上がってから渡り廊下を渡っていく。

「桜……咲いてませんね」

渡り廊下の途中の窓から中庭を眺めたフランチエスカが、ぽつりと呟いた。

「今は二月の終わりだから、こつちだと八月の終わりから九月の頭ぐらいだ。咲いてないのも無理はない」

「そっか、そうでしたね。あの桜、綺麗だったのに……あれ」

「……」

意識せず口に出たのだろう。フランチエスカは自らの発言に驚いたように口に手を当てた。

目が覚めてから、フランチエスカは咲いた桜を見た事が無い。学園の中に咲いた桜なら猶更だ。

つまり今の発言は、フランチエスカの中のあいつの記憶が呼び起こされた事を意味していた。

目が覚めてからの数ヶ月間音沙汰が無かった記憶が、こうも簡単に呼び起こされる。

こうして学園を調査する事が、夜の散歩をするよりずっと効果的なのだろう。

「……気分が悪くなったりしていないか？」

「あ……はい。それは大丈夫です。行きましょう」

記憶の混流による体調不良などはないようだった。その点は素直に安心出来る。

フランチエスカが歩き始めるのに合わせ、俺も歩を再開する。

渡り廊下を抜け、階段を下りて右に曲がり、突き当りまで進めば家庭科室に辿り着いた。

「……久しぶりだな」

嘗て、林檎を剥くジャックナイフが座していたこちら側の家庭

科室。

今は主が居ないこの場所はあちら側と差異はない筈だ。中から声もしなければ、昂った感情による空気の淀みも感じない。

本当に三つの光の内の一つが居るのか怪しく思うが、それは扉を開けてみれば分かる事だ。

「…………ここに居た七不思議さんは、林檎を剥くジャックナイフ」さ  
んでしたよね」

「ああ。何と言うかまあ、機嫌が悪いと刃物を投げってくるような奴だった。意外と会話は出来たけどな」

「刃物を投げってくる人と会話をしようとするなんて、魔術師って凄いですね」

素直に感心してしまったフランチエスカが家庭科室の扉を開ける。

「反転」の「結界」により、異界の入り口である昇降口、そして範囲の外に繋がる屋上の扉以外の鍵の状態は全て「反転」している。今なら特別棟のあらゆる教室には入り放題だ。家庭科室はジャックナイフが誰も入ってこないように鍵を掛けていたが、既に彼女はここには居ない。

緩やかに、微かな摩擦音を立てて扉はスライドする。開かれていく視界の中で、俺は月明かりを光源に内部を確認する。

「…………異変はないな」

「そうなんですか？」

フランチエスカの声に頷く。全体を見渡す限りでは、何度か授業で使った際や三葉と会話をした際の記憶と違いはない。

「ああ。前は包丁指しにジャックナイフが刺さってた。軽いスプラッタだったな」

「スプラッタ…………？」

聞き慣れない単語に首を傾げるフランチエスカ。その隙に、俺はフランチエスカを追い越して家庭科室の中に入る。異変はないが、危険がない確信もない。

「…………お前は」

そうして足を踏み入れた俺の存在に、どこかの誰かが反応した。若

い男の声だった。

追いついてきたフランチェスカと共に、声がした方を見る。

——居た。嘗てジャックナイフが座していた家庭科室の奥の一席。そこに、俺達以外の人型が存在していた。

先日邂逅した外套の男と同じ、黒い外套を纏い、フードを深く被る事で一切の外見を隠蔽した男。

「フランチェスカも、か……」

「こ、こんばんは……」

男はフランチェスカの事を知っているようだった。

そして口振りからして、俺の事も知っているのだろう。

「……お前は、体育館に居た黒い外套の男が分裂した姿だな」

俺とフランチェスカの存在を知る、黒い外套の男。この条件に当て嵌まる可能性は一つしかない。

そして、その可能性は間違いではなかったのだろう。男は布の奥に隠された眼光を俺に向けた。……この視線は、外套の男から受けたものの一部だ。

「態々確認する必要もないだろ。知っているからここに来た。俺に会いに来た。違うか？」

本人から認められた言葉を受けながら敵対行動を取らないのは、この男から邪気を感じなかったからだろう。

それは向こうも同じの筈だ。構え一つ取る事無く、俺の存在を睨み続けている。敵対心はあるのだろうか、一応こうして会話が出来る可能性があると分かったのは収穫だった。

その敵対心に対しても問題はない。男の憶測は正しくはない。その言葉を掛けるべきは俺ではなく、もう一人の方だからだ。

視線でフランチェスカの方を見ると、意図を理解したフランチェスカは俺の横に並んだ。

「あの……あたしの方なんです。あなたに会いたって思ったのは」「君が……？」

男は不思議そうにフランチェスカを見た。表情が見えない割には感情が分かり易い奴だ。

「その……どうして昨日、あたし達を襲ったのか。それを知りたくて」  
「……それは」

男からの答えはなかった。

そこには罪悪感や後ろめたさはない。答えられないのが当然であるかの様に、自然な様子で男は沈黙する。

答えが返ってこないと思っていなかったフランチエスカも、困ったように黙り込んでしまう。このままでは埒が明かないのは明白だった。

「お前はフランチエスカの問いには答えられない。そうだな」

男は俺の方を見るが答えない。沈黙が肯定だった。

「なら、もうここに用はないな。行くぞ、フランチエスカ」

「芳乃君……」

「お前の目的は外套の男の真意を知る事だっただろう。こいつにそれは期待出来ない。分かっただろ」

フランチエスカの性格からして、後ろ髪を引かれる気持ちになるのは理解出来る。

だが、目の前に居るのは昨日俺達を襲った男が分裂した姿だ。今はまだ危害を加えてこないが、何時敵対するかは分からない。

「……深花芳乃」

担いででも家庭科室から出ようとした時、男が俺の名前を低く呼ぶ。

男の声色は恨みだった。俺に向けた感情だけではない。この世界全てを呪うかの様な、己さえ対象にした怨嗟の音色。

その対象から外れているのは、きっと俺の隣に居る少女だけだ。

俺の反応があるかどうかなんてお構いなしに、男は言葉を紡ぎ始める。

「お前にとっての本物はもう出会っている」

あいつの事を言っているのは明白だった。

一人の魔術師の興味によって出会った二人は、恋情の夜を駆ける契約を結んだんだ。

それが深花芳乃という魔術師を変える事になるとも知らずに、俺は

あいつと契約をした。

「俺にもあった。本物が」

「……、」

遠い過去を想うように。男は恨みを綴る。

「何故自分がこんな事をしなければならなかった。そんな事を思った事はないか？ ……俺はあるぜ。無限にな。恨めしかった。周りの人間が。当たり前前にその場所に居る人間が。……俺自身の責任が。気が狂う程に恨んだよ」

それは誰の経験なのだろう。こいつが体育館に居た外套の男の一部であるのなら、外套の男の経験なのだろうか。

「お前も喪ったんだろう。最愛の少女を」

「……、」

「穴が開いたんだろう。お前の心に」

三つに割れたとしても、やはりこいつは外套の男である事には違いないようだった。体育館で奴に言われた事と同じような内容を、再び俺に突きつける。

男の言葉に、フランチェスカは切なげに俺を見る。その心境がどういったものであるか、想像するまでもないのが後ろめたい。

「お前はフランチェスカの傍に居ていい人間じゃないんだよ。お前がそうやって彼女を求める程に、フランチェスカ自身を傷付けていくんだ」

「……、」

フランチェスカの息を呑む音が聞こえた。つまり、それは真実なのだろう。

「何故お前がフランチェスカの傍に居るんだよ。交わらない筈だったお前が、安息を破ってそこに居るんだ。この恨みは、その事実だけが湧き起こしている」

「……さつきから黙って聞いていればべらべらと。お前に用はないって言った筈だ」

「断ち切ろうとするのは怖いからだろうか？ お前の行いがフランチェスカを傷付けている現実を見つめる事が」

それが俺の罪であるように、この男は俺への恨みを突きつける。

「開いた心の穴を塞ぐ為に、お前は何をしてきた？　そうして何を得た。お前が欲するものは手に入ったのか？」

「勝手に言ってる」

俺とフランチェスカの問題に、これ以上口出しされる理由はない。

フランチェスカの目的も果たせない。こちらに害を為してくるわけでもない。恐らくこの校舎からは出られない。そんな存在を、これ以上相手をする理由なんてなかった。

無理矢理にでも踵を返そうとした時、今までずっと黙っていたフランチェスカが男の方を見た。

その瞳はいつもとは様子が違う。気弱ささえ感じてしまう穏やかさはどこかへ消え、微かな怒りを感じさせた。

「これ以上芳乃君を責めるのは止めてください」

フランチェスカの言葉に、俺と外套の男は言葉を失った。

「……芳乃君の事、何も知らないじゃないですか。何が分かっていますんな事を言うんです」

「フランチェスカ……お前」

「嫌なんです……一人ぼっちでお昼代も無くて、お腹が空いている事より。あたしの事を『反転の魔女』だと呼んで、命を狙われる事より。あたしの大好きな人が、あたしの事で悪く言われるのはずっと嫌」

睨むと言うには圧が足りない眼差しで、それでも精一杯外套を牽制する。

自分の事ではこんな風に自らを奮い立たせる事なんてしないだろう。唯相手に言われるまま黙って耐え、時が流れるのを待っている筈だ。

その見解は間違いではないようだ。外套の男さえ驚いたように黙ってフランチェスカの言葉を聞いている。それだけこの男の中のフランチェスカとは違う性質を見せつけられた証だ。

そしてその動揺を表すかの様に、男の姿に異変が誘われる。

「っ——」

「お前……！」

ノイズの様に、男のシルエツトがぶれる。それを皮切りに徐々に輪郭が光の粒子と変わっていく。

嘗ての七不思議達とは違う。光の粒子だけ見れば、まるで昨日の外套の男の逆再生の様だと思えた。

「だ、大丈夫ですか!？」

思わず心配をしたフランチェスカへ、男は自らの異変の結末を知っているかの様に首を横に振った。

だが、その様子は穏やかだった。気が狂う程に何かを、何もかもを恨んだらしい男に似つかわしくない、精一杯の強がりと思えた。

「君は……何時でも優しいな」

「え?」

「お腹が減っていても、他の子に食べ物に分けてあげていただけだろう。学校では一人で寂しくても、皆に学校の楽しさを伝えていたな」

「……どうして、それを」

既に殆どが粒子と化した男は、フランチェスカの問いに答える事はなく、謔言の様に自らの何かを振り絞る。

「幸せになればいいと思っていた。報われてほしいと願っていた。だから……俺が幸せにしたかった」

願望を吐き出し、それを叶えてしまった事が限界だったのだろうか。

「フランチェスカ……君の本当はどこにある」

その言葉を残し、男は存在を家庭科室から消していく。

男を模っていた粒子が、存在しない風に乗るようにある方向へ流れていったのを、俺は見逃さなかった。

## 8. 辛みの外套

「……『恨みの外套』、ってどこか」

男が消え去った後の家庭科室。その中で俺は奴の言葉や感情の中から特徴を見出し、そのまま名称とした。

その眩きを聞いていたフランチエスカは、ひよっこりとこちらを覗き込む。

「恨み……ですか」

「別に珍しい感情じゃない。そんな感情が一切ない人間の方が信用出来ないな」

『恨みの外套』が揺らいだ瞬間からすっかりその様子はなくなっていたフランチエスカの怒りも、その感情の一つだろう。

「え、と……それで、『恨みの外套』さんはもしかして……」

ある方向——『恨みの外套』が粒子となって流れていった方を見ながら、フランチエスカは俺へ言外に問う。

フランチエスカはこの校舎内での土地勘があまりないせいで気付かないと思っていたが、しっかりと気付いていたようだ。

「ああ。恐らくは体育館に戻ったんだろう。あれが外套の男の一部であるのなら、ありえない話じゃない。まあ、三分の一のあいつが、ここに居た時の様に姿形が保てているとは思えないけどな」

隠している理由もないので素直に答える。更に言えば、これはこれからフランチエスカがやらなくてはならない事に繋がる情報だ。

それが分からないフランチエスカではない。

体育館の方を見つめたまま、フランチエスカは謔言の様に自らの考えを口にした。

「残りの二人も、あそこに戻ったのなら……」

「俺達が昨日出会った外套の男は、再び体育館へ顕現する」

答えを引き継いだ俺の言葉に、フランチエスカはこちらへ視線を移した。

月明かりに照らされた世界の様な薄青の双眸へ俺は続ける。

「やろう、フランチエスカ。『恨みの外套』はお前の問いに答えられ



なかった。恐らくは残りの二人も同じだろう」

だから、あいつには元の外套の男に戻ってもらわなければならない。  
い。

元に戻す事で俺達への敵性が復活する恐れもあるが、危険なのはこ  
うして分裂した外套の男に会いに来た時点で覚悟していた事だ。

ランチエスカの目的は元に戻ってもらわなければ達成出来ない  
のなら、俺達に迷う理由なんて存在しなかった。

「それに残りの二人と接触する事で、あの男の正体に近付ける可能性  
が高い」

「そういえば……知っていましたよね、あたしの事」

そう。《恨みの外套》はランチエスカの事を詳しく知っていた。

外套の男が語った、幸せとか安息とかそんな安っぽい言葉ではな  
く、エピソードとしてランチエスカの行動を記憶していた。

「元々あいつとランチエスカが同世代なのは予想が付いていた。そ  
の上で日常でのお前の事を知っているとすれば、その対象はかなり絞  
られてくる」

何よりあの口振りからすれば、ランチエスカを《反転の魔女》で  
はなく、一人の人間として捉えていた事になる。

そんな風にランチエスカを見れる立場の人間は、決して多くはな  
い筈だ。当時のランチエスカは孤児院育ちで、学校には友達が居な  
かった事はあいつの口から聞いている。

そうともなればランチエスカ自身が何となく候補を付けられそ  
うなものだが、生憎とそう簡単にはいかないらしい。

「前も言った通り、見た事があるような気はするんです。《恨みの外  
套》さんが言っていたあたしの行動は、孤児院で実際にやった事もあ  
ります。でも、孤児院に居た人達の中にあんな黒いコートを着た人は  
居ませんでしたし、声を聞けば分かる筈なんです」

「成程。見た事はあるけど面識はない、って事か」

ランチエスカの領きを区切りに、一先ず俺達は家庭科室を後にす  
る。

《恨みの外套》が去った以上、これ以上この場所に居ても進展はな

い。『反転』の『結界』は深夜の間の僅かな時間にしか存在しない。時間を無駄には出来なかった。

「次は図書室だな。行くぞ」

「はい」

差し出した服の袖を握ったのを確認して、俺とフランチェスカは図書室へと移動を開始する。

図書室へは特別棟の一階であるここから四階まで階段で昇る必要があり、更に廊下の反対側まで歩かなければならない。

そんな長い移動の最中、フランチェスカはふと訊いてきた。

「図書室の七不思議さんは、どんな人だったんですか？」

「『童話に還るアリス』。こっちでの姿は小さな女子生徒だったな。

容姿も性格も幼い感じだったから、基本俺は怖がられていたな」

「……芳乃君、小さな子の相手とか得意そうですけど」

きよとん、と至極不思議そうにそんな事を言われるのは初めての経験だった。

桜にも、上桐にも——勿論あいつにも。寧ろ子供の相手なんて絶対出来ないと思われていそうなのに。

「お前はそう思うんだな」

「そうですよ？　だって芳乃君、とっても優しいですもん」

「……お前に対しての態度を基準にされるのは困る。誰彼構わず世話を焼く俺なんて想像出来るか？」

言われたフランチェスカは、実際に想像してみたらしい。

「んー」なんて呑気な声を出して口元に人差し指を当てている。フランチェスカにとってトラウマの地であるこの学園で、こうして気を抜いてくれるのは精神衛生上いい傾向なのだろう。図書室に着いてから気を入れ直せばそれでいい。

そう思っただけ好きにさせていたが、フランチェスカの声は段々と沈んでいった。一体どうしたのかと目線を送れば、掴んでいる俺の服の袖を控えめに引きながら、小さな声でこう言った。

「……その。芳乃君の優しい所、あんまり知られたくないです」

珍しく、本当に困ったように訴えられる。

恐らく初めて抱いたであろうその感情は、俗に言う独占欲と呼ぶものだろうか。

そんな心配なんて一つも要らないというのに、フランチェスカは大真面目に俺に訴えかけていた。

その様子がおかしくて、俺は呆れた素振りを見せながらも、きつと内心では笑っていた。

「知る人間が居ない。安心しろ」

そもそも俺が優しいという評価はフランチェスカの主観だ。それを否定する事はしないが、フランチェスカ以外にはそうではない可能性だって大いにある。上桐に対しては絶対に当て嵌まらないだろう。そうこう話している内に、図書室の前まで辿り着いた。

家庭科室と同様に、内部から溢れ出る異常はない。元々ここに居た「童話に還るアリス」という七不思議に凶暴性はない。嘗て精神の異常を表現するかの様に図書室内の本棚から本が散乱していた事があったが、ジャックナイフの様に俺達へ害を為す事はなかった。

そして、フランチェスカの直感通りなら、ここにも外套の男を構成する三人の内の一人が居る。

「開けるぞ、準備はいいか？」

「はい」

「恨みの外套」と同じように、主に俺に敵対心はあれど会話が通じる相手ならいいのだが、今回もそうである確証はない。

最大限警戒しながら、俺はゆっくりと図書室の扉をスライドさせ、内部へ侵入する。

「図書室も大きな異常は無さそうですね……」

「……ああ、そうだな」

俺はフランチェスカの確認に、少し間を置いてから返事をする。

亡者の学園での図書室の異常は、所々背表紙がひっくり返されて収納されている童話だらけの本棚だ。

近くの本棚を確認しても、あちら側と変わらない普通の本棚だった。

名前を聞いた事があるような流行りの作家の小説が纏められた新

刊コーナー。図書室はあれ以来何度も利用しているが、全く興味が無かったのでこんなコーナーがある事自体知らなかった。

ともあれ、家庭科室と同様に、図書室にも亡者の学園の影響は見られない。

家庭科室と同様であるならば、俺が見るべき方向は決まっている。

月明かりだけが頼りの室内で分かっているかのように視線を向けた方向へ、フランチエスカも同様に向けた。

「……待っていたよ」

——嘗て童話に還った童女の様に、月明かりに照らされた男が窓際の椅子に座っていた。

その姿は外套。『恨みの外套』と同じように、フードを深く被り顔の情報を隠蔽している。

だが、その体軀は『恨みの外套』より少し大きく見える。例えるのなら『恨みの外套』が俺で、この外套の男は上桐の様な関係性だ。

三つに分かれたにしてはおかしな事だった。取り込んだ想念の量の違いか、それとも別の要因でもあるのか。

「待っていたのなら、そんな隅じゃなくて真ん中に堂々と鎮座してたらどうだ」

「ここに居るのが自然な気がしてね。惹かれてしまった、と言う方が正しいかな」

「魂だけとは言え、随分と感覚的な事だ。魔術師が聞いて呆れるな」  
「……ああ、肝心な時にもそうであればよかったんだけどね」

どこか引つ掛かる物言いだったが、重要な情報の一つに確証が取れた。

この男は魔術師だ。なら、俺に対して行った精神干渉も魔術という事になる。魔術だろうが魔法だろうが『属性』頼みの俺の耐性は関係無いのだが、魔術だと分かった事は外套の男の理解に大きく繋がる。

魔術を使う事実に対しての考察はまたあっち側に戻って上桐にでもさせればいい。あの男に頼るのは本当に癪だが、今は使えるものは何だって使うべきだ。

「あたし達も、あなたを捜していたんです」

「僕を？ ……それは光栄だね」

言葉とは裏腹に男は目を伏せ、俺達と向き合おうとはしない。

フードで顔は見えないので、厳密に言えば若干俯いたという表現が正しいか。

その声色には辛苦が混じっていた。発言の内容とはまるで反対だ。「確認したい事がある。お前は三つに分かれる前——元のお前の考えは分からないな？」

「そうだね。記憶はある。何をしようとしたのかも分かる。でも、理由だけは分からない」

俯いたまま声を紡ぐ態度は、およそ友好的とは言い難い。

これがフランチェスカからの質問であったのなら、顔ぐらいは上げたのだろう。

恐らく、「恨みの外套」と同じように俺へ敵意は持っている。だが、やはり襲い掛かってくるような凶暴性はない。

「期待に沿えなくてすまないね」

「答えられるとは思ってない。期待通りだ。 ……まあ、お前の根幹に纏わる疑問は、些か増えたけどな」

俺への敵意は消えていない。しかし、俺がフランチェスカと共にいるという事実だけで会話をしている。

フランチェスカへの感情が、敵意を抑え込む程強い。霊体である以上どんな存在よりも本能に近いというのに、まるで理性の様に機能している。

その外骨格の様なフランチェスカへの感情を持ちながら、何故フランチェスカの記憶から明確にお前の存在が出てこない。

「その点についてはお前が元に戻ってから問い詰めてやるさ」

「だから、今はあなたとしかお話し出来ない事を ……と思ってきました」

「そうか ……君と話せるなんて、これが僕の罪に対しての罰なのかな」  
たとえ分裂したとしても、自分だけの世界に閉じ籠った会話しか出来ないのは変わらないようだ。

だが、これだけ執着しているフランチェスカの会話を『罰』と言い、それが罰になるだけの『罪』が自分にあると自覚している。

この男の素性を掴む為にも、この話題を逃すわけにはいかない。

「罪と罰、ねえ。随分と大層な表現だ。魔術師らしい気取った考え方だな」

「あたしとお話しする事が……罰、なんですか？」

俺の挑発とフランチェスカの疑問。そのどちらに対してなのかは分からないが、男は辛そうに頷いた。

「何故自分にこんな事が起きるのか。そう思った事はないかな？ 自

分という世界を構築する全てが辛かった事は？ 僕はあるよ。永遠

にね。辛かったさ。周りの称賛が。過去として受け止める冷徹さが。

……僕自身の選択が。気が狂ってしまいう程に辛かった」

“辛みの外套”、とでも言った所か。家庭科室で出会った“恨みの外套”よりは氣質が大人し気なのは抱えている感情の違いからか。

こいつの後にはグラウンドに居るであろう外套の男にも会わなくてはならない。願わくば“恨みの外套”が凶暴さの最大値であつてほしいものだ。

「最愛の少女を喪う、心に穴が開くような経験を、君もしてきたんじゃないかな」

そして、やはりどう分裂していようとこの男が外套の男の一部である事には変わりはない。体育館で投げ掛けられたような問いを、こいつもしてくる。

だが、今までの二人の様に俺を責めるような口振りではない。同意を求めるとは俺への確認。同じような言葉でも、“恨みの外套”とはまた違った意味合い。

こいつがあのだ外套の男の一部であるのなら、外套の男が俺に掛けた言葉には、そういった感情も含まれていたのだろうか。

「答える義理はない。そもそも、俺はお前に用はないんだ。会話ならフランチェスカとやれ」

「成程。君は僕に罰を受け続けろと、そう言うんだね。君がそうしているように」

言いながら、「辛みの外套」はそれを受け入れるようだった。フランチェスカの方を向き、話を聞く体勢を取る。

「……フランチェスカ？」

「辛みの外套」が呼ぶ名前に、俺もそちらを見る。

フランチェスカの表情は沈んでいた。元々ポーカーフェイスが得意な奴ではないが、こうまで沈んでいるのを見るのは初めてだった。

「罪と……罰」

薄青の双眸が俺に向けられる。仄かに潤む瞳が伝えるのは哀しみ。

……何が罪で、何が罰なのか。フランチェスカがどんな風に考えているかなんて、言われなくても分かっってしまう。

そして、実際に否定したところでフランチェスカの心を軽くする事は叶わない。それが俺の本当の罪である事は明らかだった。

「……過ぎ去った思い出を求める事は、罪なんですか」

「人は過去には生きられない。罰と断じられる事もある」

「でしたら、思い出の代わりに求める事が、罰なんですか」

「失いたくなければいい程、新たな何かを得た時に比べてしまう。満たされない事自体が罰になるだろうね」

「辛みの外套」の言葉は、停滞そのものに感じられる。

過去に生きられないと言いながら、確実に過去に縛られている。

それがどんな理由からなのか、「外套の男」の素性が判明すれば明らかになるのだろう。

「無駄なのさ。願う事自体が。顧みる事全てが。……もう、そこにはない。叶わない事だと、受け入れるしかない」

残念ながら、「辛みの外套」の言葉は俺にも理解出来てしまう部分がある。

ないものはない。もう、あいつは返ってこない。それを全部理解して、俺達は今に繋がる決断をした。

……だけど、諦めずに探し続けてくれている存在が、俺の隣には居る事も知っている。

「……違います」

停滞の言葉を受けてのフランチェスカの否定の言葉の続きを、「辛

みの外套”は待った。

「まだ、あたしの中にはあるんです。埋めてあげられるものが、あたしの中には残されていますから」

「……君は」

俺の心の欠落。あの日に欠けた、桜とは違うもう一つの心の穴。

それを埋められる何かを哀しげに求め続けるフランチェスカを見て、  
“辛みの外套”の中の何かは刺激されたのか。

「——っ」

「……」いつにも始まったか」

ぶれ始めた“辛みの外套”のシルエットを見て、俺は一人呟く。

言葉通り、家庭科室の“恨みの外套”と同じ様に、この外套にもシルエットのぶれから始まる光の粒子への変換が見られた。

いきなり始まった前回とは違い、今回は多少冷静に観察をする事が出来ている。グラウンドに座しているであろう残り一人の外套との邂逅の際にも役に立つだろう。情報の収集はしておくに限る。

「あなたも……消えてしまいませんか？」

「ああ……そうみたいだ。僕をここに留めていたものを、君に取られてしまったのかな」

「あたしが……？」

フランチェスカを見つめながら、外套の頭部は揺れた。

こいつをこの図書室に留めていた要因。童話に還った童女の聖域に残された、秘匿されるべき神秘。

それをフランチェスカが奪った事で“辛みの外套”が体育館へ戻っていく。理屈は分かった。その要因を探すには、時間は足りそうにはないが。

「正しくは、その主が君になったと言うべきかな。流星は、この“結界”の主だ」

「そんな……」

「君が、特別でなければよかった。たった一つの特別が、君の幸せを遠ざける。あの過ちさえなければ、君は……」

こいつの言うフランチェスカの幸せが何なのかは、この際どうだっ



ていい。

この男もまた、フランチェスカの過去を知っているような口ぶりだった。眠りに就く前のフランチェスカの、個人としての過去を知る事が出来た人物である事は明白だ。

「君の……幸せを、守りたかった」

願う事さえ無駄だと悟った男の、遺言の様な一つの願望。

粒子と共に空気に溶けたその言葉を、俺達は静かに聞いていた。